

西田直二郎日記（3）

入山洋子 †

はじめに

前稿、前々稿⁽¹⁾に続き西田直二郎（1886～1964）の日記のうち、1928（昭和3）、29（昭和4）、34（昭和9）年の3冊を紹介する⁽²⁾。京都帝国大学文学部の教授となり数年、四十代の脂が乗った時期である。社会状況は対外的には満州国建国、国際連盟脱退と孤立へ向い、国内では思想弾圧の矛先が自由主義勢力へも拡大、さらに弾圧から積極的な思想善導へと進んだ時期であり、西田も渦中の人となっていく。以下、日記の内容に沿って幾分の解説を試みる。

1. 大学の授業・研究活動

1-1 1928年、29年の授業

例年通り、普通講義と特殊講義、演習および史学科共通正科目の史学研究法を受け持った⁽³⁾。龍谷大学でも引き続き教鞭をとり、27年度から大阪府女子専門学校（以下、女専）にも出講する。火曜午後に龍大、木曜午後に特殊講義と演習、金曜に普通講義と史学研究法、土曜に女専へ出向き、そのまま大阪東区（現天王寺区）の浄土宗天然寺の実家にしばしば立ち寄っている。

1-2 京城府にて

28年7月、京城帝国大学法文学部講師を囑託される。この年10月後半は京城帝大出講中、妻道と

ともに京城府内に滞在した日々の記録である [28.10.12～10.26]⁽⁴⁾。京城帝大では28年4月に国史学第二講座が開設されたが、当初担当教授の枠は埋まらず、大阪高校教授兼京都帝大講師の松本重彦が赴任するのは翌年7月である⁽⁵⁾。その間の穴埋めを西田が担当した格好となる。

この時期、同大学法文学部に赤松智城、今西龍、予科に名越那珂次郎、総督府図書館長に荻山秀雄らの旧知がいた。ドイツ文学者の田中梅吉（京城帝大助教授・予科教授）[10.16]は、かつて西田と同時期にベルリン大学に学んでおり⁽⁶⁾、そのとき交流ができたのだろう。

10月18日には中村直勝率いる史学科学生の旅行団21名と合流し、26日まで京城、平壤および周辺の史跡名勝や博物館を見学、翌日一行と共に下関に降り立った。見学旅行は国史科の慣例行事であり、34年の日記にもその記録があるが [34.5.11、5.12、10.13～10.20]、28年は西田の京城帝大出講を機に、初めての「外地」旅行となった。1930年代以降本格的に展開される帝国日本勢力下の満州・朝鮮方面へのツーリズム⁽⁷⁾のはしりの時期であった。

旅行団の到着に先立ち、李王家宮殿、総督府など見学ルート施設の事前を訪問、関係者に挨拶する様子が記される [28.10.16、10.17]。18日、

† 同志社大学人文科学研究所 囑託研究員（社外）

ゆかりの教員たちとともに京城駅に出迎えた西田は、「果してはるけき路を一行が無事踏みこえて来るんだらうかとひそかに案じて〔中略〕よくこそ来たことかと思つた」と後に語ったという⁽⁸⁾。総督府鉄道に乗り込み、鉄道のない地へは自動車に分乗し、大移動の8日間であった。この旅行については参加学生による旅行記があるので⁽⁹⁾、ここではそこに記されていないことに触れておこう。

20日、京城から平壤に向かう途中、平壤の46キロ手前の沈村駅で列車が立ち往生し、次の分岐駅、黄海黄州駅まで10キロあまりの道を深夜に歩くこととなった〔10.20〕。原因は先行列車の脱線である。日本統治下の朝鮮半島は、組織的な抵抗運動こそ押さえ込まれていたものの散発的な抗議行動は日常的に見られ、6月に起きた張作霖爆殺事件後の緊迫した情勢でもあった。特に平壤は反日感情が根強く残る地域である。この日の脱線事故との関わりは不明だが、旅行団到着前日に平壤の中学校長から注意を受けているのは〔10.17〕、こうした状況と関係があるだろうか。

無事にたどり着いた平壤では、牡丹台などの景勝地とともに妓生学校も見学した〔10.21〕。10代の少女に朝鮮の歌舞や日本歌舞、日本語などを習得させる妓生の養成所「妓生学校」は、「学校ということから教育者が大手をふって参観」する「観光名所」となっていた⁽¹⁰⁾。

ところで、旅行期間も含めた一ヶ月ほどの朝鮮半島滞在中、史跡や自然景観への関心は依然として高く、黄州駅では居合わせた西洋人の様子を書き留めたが、その地に住む朝鮮人に関する記載は見られない。この点、東京帝国大学在学中の1932年に朝鮮を訪れた竹内好や、大正末期に京城中学校の生徒であった中島敦が、朝鮮人の生活や植民地社会の現実を書き留めているのと好対照である⁽¹¹⁾。また、西田は33年春に英領ボルネオ島および蘭領東印度諸島を訪ねるが、その際は現地社会に大いに関心を示し旅行日記も綴っている⁽¹²⁾。

これに対し、朝鮮人・植民地朝鮮の現状への積極的な関心を読み取ることができないことは指摘しておかねばならない。

1-3 1934年の授業

創設期から国史学講座を牽引した三浦周行が1931年に退官した後、西田は唯一の教授として国史学二講座を兼担した。学外では引き続き龍大、女専のほか、大谷大学へも新たに出講している。

後述するように、このころから本職以外の職を多数兼務して多忙を極め、「朝早くより夜十二時まで寸隙なし」〔34.6.14〕など、日記にも再三ぼやきがこぼれる。そのためか、大正期の日記にみられた学生との交流や出張先での記録は、ごくあっさりしたものにとどまる傾向にある。

1-4 研究活動について

西田の主著『日本文化史序説』が改造社から出版されるのは1932年であるが、28年も完成に向けてたびたび手を加えている〔28.1.5、1.6、5.1、5.2、8.28、9.5、11.7〕。

西田の受講生であった山根徳太郎や池田源太、肥後和男らが、大正末期に西田宅で始めた「金曜会」は、昭和になると「民俗談話会」に発展、民俗学に関心をよせる他科・他学部の関係者とも広く連携して見学会や例会を行うようになる〔28.6.4、8.27、29.3.10〕。その後「民俗学会」と改称し公的な学会組織として活動を続ける〔34.10.29〕⁽¹³⁾。

民俗学への関心は、民間の研究補助団体、服部報公会の助成を得て33年度から実施した、神事芸能の映像記録撮影へと深化する⁽¹⁴⁾。34年は、神戸長田神社〔34.2.3〕、春日若宮社〔4.7〕、丹後熊野社〔7.9〕の神事をそれぞれ現地で撮影し、和歌山那智神社の田楽は女専講堂で撮影した〔6.7〕。10月には深田部神社（京都府竹野郡）の田楽を撮影するが、日記では社掌に書簡を認めていることが確認できる〔9.15〕。

こうした田楽調査への情熱は、日本の象徴詩を確立した竹内勝太郎のような人物との接点ももたらした [9.15]。竹内は翌年に非業の遭難死を遂げるが、晩年は芸術論・宗教論にも関心を持ち、34年には「能狂言起源の研究」で学位取得を目指し矢田猿楽の調査を模索していた⁽¹⁵⁾。

2. 学内行政のこと

2-1 中村直勝の処遇について

1928年5月に開かれた東京帝大の史学会大会は、徳川光圀生誕300年、松平定信没後100年の記念大会と位置づけられ、当日は三浦周行らの講演で大盛況を取めたが⁽¹⁶⁾、西田には「お祭ばかり」で「史学の研究機関たる職分を忘れ」たものと映った [28.3.9]。

12月には、三浦から堺市史の年表作成を求められた藤直幹に対し、「年表の如きは売れ行きよしとてつまらぬ」ものと忠告する [12.25]。後年、京都市史を編纂する際にも、年表は「もう古い考へ方で、これは綱文を充分完全に書き上げる方が宜しい」と言う⁽¹⁷⁾。事実を羅列するだけの年表に学術的価値はないとの判断であり、従来の歴史学への批判でもあった。

このように、三浦との学問上の距離を示す記述が間々見られるが、中村直勝（第三高等学校教授）の処遇をめぐる衝突が表面化する [28.12.7、12.12]。前年に文学部助教授兼任（27.7～）となっていた中村を専任助教授にして東京帝大の史料編纂掛に内地留学させる、との三浦の提案が発端であった。日記の記述だけでは分かりにくいので、同時期とみられる西田の手帳から一部を抜粋しておこう⁽¹⁸⁾。

「大学として教授選定ハ一代でなく二代に渡り、この意味にては永遠なもの。学問と人格人柄〔傍点・下線ママ〕を考へること。定年制度ニ伴フ問題としてこれをあやまることはこの制度として

弊害百出の本をつくる。■■■〔ママ〕君については、已に兼任助教授にするとき私は聊か躊躇〔ママ〕するところあった。〔教授会にても質問者があったときに一二年間専任にせぬことを〔三浦が〕言明された〕。これを翻すことは「国史料として余りに手をかへしたやうであり不信義甚しきものがある」。

「特別保護は不正な保護にまで〔で〕進む。fareでなくなる。更に二年後誰れか〔が〕これについて影響を最も多くうけるか。学生・他教授である」。

まずは、27年の中村の助教授就任は三浦の意思が強く、条件付きであったことが知れる。にも関わらずこれを反故にする提案は「先年の言辞に背く」 [12.7] もので国史学講座の信頼に関わるだけでなく、特別扱いが将来的に弊害を生むと反対しているのである。三浦にしてみれば3年後に迫った自身の停年を見越し、後を中村に託すための布石として、研究時間を確保し業績を上げさせるためのプランであろう。在外研究の機会に恵まれない中村への配慮もあったと思われる。

手帳のメモには中村の研究業績に関し、「一氏〔三浦〕ハ〔中村の〕論文ハ時間足らない為めとするが論文は量ノ問題よりも質の問題である。時間足らぬため発表足らぬ、随分発表するが質ノ悪いことあり」⁽¹⁹⁾と厳しい見解も記されている。よって、道義上の問題と特別扱いの弊害を考慮しての反対であったが、根本的には、その任にあらずとの判断があったのだろう。

周知のとおり、中村は三浦退任後も長く助教授にとどまり、博士学位の授与は西田が大学を去る46年まで待たねばならなかった。古文書学や南朝の研究等に多大な功績を残し、その人柄から後進に慕われ学問的にも大きな影響を与えたことは今更言うまでもないが、西田の中村評価は低かった。人事が最重要かつセンシティブな問題であるのは

世の常である。西田にしても「大学として重大なこと、最大なことにて余程考へた」末の結論であった⁽²⁰⁾。

2-2 連携の強化を目指して

1931年に三浦が停年退官し、西田が国史学講座を主導するようになると様々な独自の取り組みを始める。

① 国史通信

まず、1931年12月創刊の「国史研究室通信」があげられる[34.7.11、10.5、10.8]。国史学講座開設から20年を経て、各地で活躍する卒業生たちの「魂のあたゝかいすみ家」⁽²¹⁾となることを目指し、研究室の近況や卒業生からの便りを掲載した。創刊後しばらくは西田が巻頭言を書いている。

② 国史学会

1933年9月には、大学院生や卒業生らの研究発表の場として、「国史学会」を立ち上げた。同様の学会に読史会があったが、同会は三浦主宰との意識が強く⁽²²⁾、また大学院生の増加に対応する必要もあった。34年は5月に大会を開いている[5.5]。その後、戦後しばらくまで春に国史学会、秋に読史会の大会という体制が続く。

③ 京大倶楽部

34年の日記には「京大倶楽部」の記事が頻出する。これは、かねて要望があったものを、西田が音頭をとって結成をみた文学部出身者による同窓会である。同窓会の組織化には、古い卒業生から反対があったが諦めず、西洋史の原随園や国文学の沢瀉久孝の協力を得ながら卒業生と交渉を続け⁽²³⁾、有志の団体としてまとめていった。副手時代、1913年の日記に天王寺中学校の「桃陰同窓会」の話題が出ており⁽²⁴⁾、早くから卒業生の繋がりに関心を持っていたことが分かる。

かくして京大倶楽部は33年中に東海地方と香川県に支部が成立⁽²⁵⁾、翌年1月には原や文学部書記の吉田孫一とともに和歌山へ行き、同県在住の文

学部出身者らと支部発会式をあげた[34.1.27]⁽²⁶⁾。5月には上述の国史学会の大会にあわせ、大阪250名、京都650名の会員を擁する支部の発会式があり[5.5]⁽²⁷⁾、広島でも当地赴任中の清原貞雄や中原与茂九郎らが集まり[5.6]、朝永三十郎・藤井乙男両名誉教授らも駆けつけた⁽²⁸⁾。その後も各地在住の卒業生と会合を持ち組織化に精力的に動いた様子がみてとれる[9.19、10.12、10.16]。出張時の会食の場などでも働きかけたことであろう[8.21、9.1]。秋にはいよいよ役員会を開き、多数の出席を得て第一回総会・大会にこぎつけた[11.16、11.24、11.25]。

④ 学会の連合開催

京大倶楽部総会・大会の日は、文学部内各種学会の開催期間でもある。23日に史学研究会大会、24日は午前と同会主催の見学会、午後に読史会大会・日本英文学会総会・京都哲学会大会、そして夜は京大倶楽部総会、25日は同倶楽部大会および国文学会大会と続いた[34.11.23～11.25]⁽²⁹⁾。当時、文学部三学科に大小合わせて30ほどの学会・研究サークルがあり⁽³⁰⁾、それぞれ思い思いの日程で大会や懇親会を行っていたが、この年初めての試みとして各科主流学会を連合して開催し、懇親の場を京大倶楽部の懇談会に集中することで各科の交流・融合をはかった⁽³¹⁾。

京大倶楽部が「文学部出身の和親と、協同」を目的としたのと同様、連合学会は特に「遠隔の地方にある同窓諸兄」の便宜を図り、同時期に一堂に会する「全文学部の一大祝祭日」たらしめ、ドイツのUniversität Woche（大学週間）に倣おうとするものであった⁽³²⁾。翌35年は学部創設30周年記念として、研究室開放や御所・二条城の拝観も予定したというから⁽³³⁾、2000年代以降盛んとなったホームカミングデーを思わせる。その後、史学科に限定すれば数年間は同時開催を維持している⁽³⁴⁾。

以上、『国史研究室通信』、京大倶楽部、連合学会を三位一体のものとして、各地に散らばる卒業生の連携強化、文学部全体のまとまりの維持に腐心する様子がうかがえる。「史学者の領域近時狭めらる」⁽³⁵⁾と研究の蝸壺化を憂慮していた西田が、史学科に留まらない交流を目指したのは自然なことであった。

2-3 学内外の騒擾

1928年の全国的な共産党員一斉検挙事件では、学内社会科学研究会からも多数の検束者を出し、同会の指導教授であった河上肇が辞職、その責任をとる形で荒木寅三郎総長は退官を決意、経済学部長の財部静治も学部長退任に追いやられた。時の政治権力に屈した事件の教授会報告がざらりと記されている [28.4.18]。6月の教授会では、学生思想対策のアメとして各大学に支給されることとなった訓育費への反対意見がみられるが、「訓育」すなわち思想矯正の必要性については共通認識となっている。また事件に関与した文学部学生二名を密かに放學処分することが報告された [6.13]。

一方、講師を務める龍谷大学では1926年の野々村教授事件⁽³⁶⁾以来、学問の自律性を指向する大学側と設立母体である宗門との間でくすぶり続けていた軋轢が、29年5月の学長人事問題をめぐり、学生も巻き込んだ大混乱に発展した。すなわち、後任学長を財団理事会（宗門側）が選任・任命することに否定的であった教授会が、次第に態度を軟化させて追認するに至ったことから、反発する学生が全学授業ボイコットを決行したため、大学は5月15日から臨時休校とせざるを得なくなる [29.5.16]。当初10日間の予定であった休校は長引き、警察による学生の検束や退學処分者を出し、6月末にようやく授業を再開するも、7月には学問への宗門介入を批判して教員11名が退職するという事態に至った⁽³⁷⁾。

2-4 学友会新聞部

このような学内外の騒擾と強権的な圧力が身近に迫る29年11月、西田は学友会新聞部の部長に就任する。1925年創刊の『京都帝国大学新聞』は、当初は「不偏不党」の方針であったが、上述の河上事件以降時事性を強めていく。他方、文部省からは事前検閲を求められ新聞部長がその責任を負うことになるなど、大学新聞にも言論統制の暗雲がかかってきた時期である⁽³⁸⁾。

西田が部長に就任する経緯は、『京都大学百年史』では以下のように説明される⁽³⁹⁾。創刊当初から部長を務めた佐々木惣一法学部教授が29年5月に辞意を表明、自ら後任部長候補を探すが果たせず、学友会会長（総長）も数人の教授に交渉するも引き受け手が見つからないまま、9月14日に佐々木は辞任する。後任決定まで部長事務取扱を命じられた大野熊雄学生主事は、発行回数を週刊から月2回に減らすこと、7名の委員以外の部員21名は退部することを求めた。これに反発した部員らは週刊制の続行、解囑反対、検閲制度反対を掲げて全学的な抗議行動を展開するも次第に下火になり、11月の学友会臨時役員会で大野の方針が承認され、西田が部長に就任した、というものである。

29年の西田日記は非常に短く、部長就任の経緯は何ら触れられていないが、この年の9月前半と思われるメモ⁽⁴⁰⁾が残されているので、長くなるが紹介しておこう。

そこでは、「学生課ニ話スコト」として「部員ハヤメルコト [中略] 部長更迭ト共に一新スルコト、形式的方面トシテヨシ [中略] 新部員ハ新部長ノ名ニテ公募スルコト」と記す。7月以降正常に発行されなくなっている新聞の発行については、「1, 第一回九月十六日ノ件 休刊ヤムナキカ。[中略] 2, 九月二十三日ハ是非出スコト」とする。「佐々木博士ニ話ス件」では「新聞部ノ為メ尽シテ頂キタル主義、努力ノ要点ヲ話シ願ヒタキコト」、「旧部員ハ徒に排除スル意ナキコト [中略] 反動的運動

ニテナキコトノ諒解ヲ得タキコト〔中略〕尚ホ少シ留任ヲ願フコトノ許サレナイコトト御迷惑ト困難ヲ察シタコト」をあげ、さらに、学友会会長から学生に伝えてもらうこととして、「後ハ新部長ニテ引受ケスルコト一是レハ特ニ願フコト」と書く。「部長ノ下ニ働ク人ヲ募ルコト。中途半派〔ママ〕ノ改造ヲシタク」ないため、「新部長ニテ部員公募ノコト」もあげている。

要するに、佐々木退任の9月14日以前に、すでに西田は新部長として候補に挙がり、自ら方針を立て新たな体制づくりを模索しているのである。そして、従来体制への批判と捉えられることを警戒し、佐々木への敬意を表しつつも、部員はすべて一旦退部し、新たに新部長の方針に賛同する者を公募することを求めた。新聞の正常な発行を企図し、新体制を9月16日から始める希望であったことも分かる。月二回発行とすることや、「部長全部校閲ノ件」、「部員ノ各部分布ノ状態 文学部委員増加ノ件」といった書き込みも見られる。

ただ、なぜ佐々木辞任直後に西田が就任しなかったのか謎は残る。事務的な問題か佐々木側の事情によるのか、もしくは学生の反発を反らす目的があったのだろうか。

ともあれ新部長となった西田は、よく知られる通り33年の滝川事件のとき大学当局と共に報道規制を敷き、これに抗議して主要部員が総退部するという事態を招いた。新聞はその後新たに募集された部員によって発行され続け、西田は「必ず編集会議に出席して学生たちとよく話し合いをしていた」⁽⁴¹⁾と伝えられる。日記からも、定期的に顔を出していることが分かる〔34.1.23、2.5、4.5、4.21、5.8、6.6、7.20、9.19、10.5、10.24、11.5〕。時にはピクニックや牡蠣船料理屋での会食など〔11.11、末尾予定一覧表5.20〕、学外でも学生との親交を図ったが反発する部員も多く、「西田部長の歴史学の門下生を中心とするグループと、滝川事件のあと

も活動を続けた高代会議〔中略〕の流れをくむ〕グループに分かれていたという⁽⁴²⁾。

1934年9月21日、京阪神地方を襲った室戸台風では、西田の下鴨の自宅も屋根瓦や雨戸を吹き飛ばされて崩壊寸前となり、大阪の天然寺も甚大な被害を受けた〔9.21、9.22〕。新聞部ではこの台風等による罹災学生に対する義捐金を募集し〔10.31〕、松井元興総長100円、西田30円をはじめとして年末までに600円を集めた⁽⁴³⁾。「菩薩の行」に基づいた活動であったが、11月の教授会では不評を買っている〔11.28〕。

この日の教授会は義捐金以外に京大倶楽部への批判や、国史学担当講師の減給などにも論が及び、西田にはストレスフルなものとなった。もっとも、教授会に同席した原随園の回想によると、「教授会でも〔中略〕意見をたてられると、自己の主張は、なかなか枉げ」ないという西田の常からの姿勢が反発を招くことがあり、今回も「論理以外の非合理的なもの」からの反対のように感じたという⁽⁴⁴⁾。

3. 学外での公的・社会的事業

歴史学の第一人者として名が上がるにつれ、本務以外の様々な仕事の依頼を受けることとなる。以下、日記に出てくる仕事のいくつかを取り上げておこう。

3-1 近畿協会

京都商工会議所内に設けられた近畿協会は、「我国特有の自然の美、歴史の精、文化の粹を普く世界の各国に宣伝紹介し」、外国人の来遊を促すことを目的に設立された社団法人である⁽⁴⁵⁾。1928年の秋、同会の西彦太郎とともに二種の京都案内書⁽⁴⁶⁾を編纂し、自ら「京都の歴史」や、池田源太に下原稿を書かせた「京都附近の仏像彫刻に就て」といった小文⁽⁴⁷⁾を掲載するほか、かつて同様の史跡案内書を共に編んだ魚澄惣五郎に協力を頼む

など、急ピッチで仕上げた [28.9.7～9.9]。

注目すべきは、「近畿協会の発展のために尽さん」と記し、大いに談論を交わすなど [9.7、12.27]、協会への積極的な姿勢である。西と連名の序文には、「もつと深く、且つ強く、我国の真実相を世界の人々に知らせなくてはならない」、「明媚な自然の風光と共に、固有の精神文化を広く世界に知らしめなくてはならぬ」⁽⁴⁸⁾との思いが披露されており、ここに後の国民精神文化研究所への関わりに通じる信念をも見てとることができよう。

3-2 京都府の史跡調査委員として

その発足以来委員を務めてきた京都府史蹟勝地調査会は、昭和初期に天然記念物も調査対象に加え史蹟勝地保存委員会と改称した。1928年は、平安宮豊楽院跡 [28.2.20] や相楽郡の瓶原離宮跡 [4.9] の発掘調査を大学院生の佐藤虎雄や山根徳太郎らを指揮して進め⁽⁴⁹⁾、大津宮では肥後和男らによる滋賀県保勝会の調査を助けた [6.3、11.13]⁽⁵⁰⁾。

年末、学生の引率で来京した黒板勝美（同会委員）と連れ立って参加した保存委員会の忘年会では、古義堂の保存とともに、明治天皇顕彰の記念塔のことが話題にあがる [12.24]。この塔は、観光開発による風致破壊がすでに問題化していた比叡山頂に、この年2月に建設が発表されたもので、夜間にはネオン点灯も予定されていた。これに対し、新たに同会委員となった京都帝大理学部教授川村多実二が中心となって自然保護・鳥類保護の観点から反対運動を展開、保存委員会としても建設反対の立場であった⁽⁵¹⁾。西田や同会の歴史家たちがどの程度関与したか不明だが、同会の雰囲気を行うことができよう。

30年から33年にかけて行われた『延喜式』記載の栗栖野瓦窯址（愛宕郡）の調査は、国史研究室・考古学研究室の一大事業となった。西田はこの調査をもとに「栗栖野瓦窯址の文献的研究」⁽⁵²⁾を書くが [34.6.4、6.24、6.25]、これを最後に報告書

への単独執筆はなく以後は共著とした。

34年11月には、北白川上終町廢寺址（京都市左京区）で金堂の瓦積基壇が発見され、さっそく府職員と現場に駆けつけた [34.11.5]。その後早々に遺構の一部を大学構内に引き取ることに話をつけ、移転保存工事を指揮している [11.7、11.10、11.18、11.21]。

西田にとって「大きな喜び」⁽⁵³⁾であった史跡調査は、地域の郷土史家との繋がりを得る貴重な機会でもあった。八幡（現京都府八幡市）の郷土史家、西村芳次郎もその一人である。西村は山城地域に多数の「三宅安兵衛遺志碑」を建立したことや松花堂庭園の保存で知られるが⁽⁵⁴⁾、それらについて西田も一役買っていることが分かる [28.9.4]。

3-3 大阪城天守閣

1928年、関一大阪市長のもとで復興が決まった大阪城天守閣は、外観の設計を建築家の武田五一や建築史家の天沼俊一らが担い、天守閣内部の利用法を西田や魚澄惣五郎、美術史の沢村専太郎らが探った⁽⁵⁵⁾。12月の会合では、復興の唯一の史料である福岡藩黒田家伝来の大阪夏の陣図屏風をめぐる議論があったことを書き留めている [28.12.15]。その後1930年に起工、翌年竣工した鉄筋コンクリート造の天守閣は、内部を郷土資料館として市民に開放し、常設展示のほか毎年数回の特別展を開催した⁽⁵⁶⁾。34年の日記にはたびたび展示準備にあたる様子が確認できる [34.1.12、1.22、4.13、4.20、7.16、8.15、8.31、9.5、11.2]。

3-4 弘法大師文化宣揚会

1934年は弘法大師空海の遠忌1100年にあたり、東京帝室博物館の展覧会 [34.3.21] をはじめ、講演会、関連書籍の出版、新聞・ラジオの特集などメディア・イベントが繰り広げられた⁽⁵⁷⁾。弘法大

師の不動を見て欲しいとの依頼 [1.21] は、そうしたブームを背景としている。2月には、西田を含む学術関係者や真言宗各派管長を顧問に、朝日新聞社が「弘法大師文化宣揚会」を立ち上げた。2月19日の大阪朝日会館での講演会に、田畑磐門（大朝京都支局長）より依頼を受け西田も登壇した [1.16、末尾予定一覧表Ⅱ -19、20]⁽⁵⁸⁾。「弘法大師展覧会」[4.12] も同会による展示である。

3-5 日本古文化研究所

黒板勝美が1934年に立ち上げた日本古文化研究所にも、浜田耕作や荻野伸三郎らとともに理事として名を連ね⁽⁵⁹⁾、奈良での発会式や役員会に出席した [34.4.8、9.9、11.4]。同研究所は財閥や民間の研究補助団体の寄附によって運営された私設の研究機関で、藤原宮の発掘調査を主な事業とするほか、複数の研究を支えた。西田は34、35年度に「建武中興及吉野朝関係遺蹟の調査」（「南朝遺蹟研究」[4.8]）を立ち上げ、近畿各府県に二、三名ずつのメンバーを配して調査を取り仕切った⁽⁶⁰⁾。9月には調査費900円を受け取っている [9.5]。

3-6 高等文官試験臨時委員

高等文官試験は1929年の改正で選択科目が大幅に追加され、国史もその一つとなった。西田は黒板勝美とともに国史担当の試験委員（試験実施ごとに委嘱される臨時委員）を務めることとなる（1933～43年）。42年度に国史が必須科目となるまでは文科系科目の受験者は少なく⁽⁶¹⁾、日記では、外交科の国史受験者6名分や、行政科の採点をしたことが記される [34.7.17～7.19、8.8、8.9]。

4. 国民精神文化研究所の所員として

4-1 研究所への入所

上述のように1934年初頭は学内外複数の業務で多忙であったが、この状態に拍車をかけ後の人

生を決定づけたのが、2月21日付で文部省の国民精神文化研究所（以下精研）の所員を兼務したことである。国民精神・国体観念の研究および普及を目指すこの官製研究所は、研究者の多くが関与を躊躇するものであった⁽⁶²⁾。西田の入所に関して文学部内で賛意は得られず、浜田耕作からは兼任ではなく責任の軽いポストにするよう諫められたという⁽⁶³⁾。それらを押しつけて研究所に入ったのは、当時の人文社会科学の傾向を憂慮し、研究所の活動に意義を見出していたためとされる⁽⁶⁴⁾。日記では、「伊東学生課長へ手紙かく」[34.1.22]という記述が文部省学生部長伊東延吉へのレスポンスだと思われる。ただ具体的なことは不明で、この年の手帳⁽⁶⁵⁾にも何も書かれていないが、我が国固有の文化を明らかにするという、近畿協会への賛同と同様の動機があったことは確かであろう。一方、研究資金や関係図書・資料といった環境面からの検討も今後の課題である。

ともあれ、精研研究部歴史科に新たな拠点を得て、4月には大学院生吉田三郎を助手に登用し [4.16]、以後45年5月に免官となるまで、研究成果を発表していくこととなる⁽⁶⁶⁾。

3月19日、初めて東京品川区の研究所に赴き、翌日は同所事業部の教員研究科第3期研究員の修了式に参加した [3.19、3.20]⁽⁶⁷⁾。続けて第4期生97名（各府県からおおよそ1名ずつ集められた師範学校・中学校教員たち）が4月に入所 [4.21]、教室いっぱい詰め込まれた研究員を前に、西田は「日本文化の発達」を全14時間講義した⁽⁶⁸⁾。「研究生に話しする」とあるのはその一コマだろう [5.14]。7月、8月にも数日間、講義・座談会を行っている [7.2～7.4、7.6、7.7、8.28～8.30]⁽⁶⁹⁾。教員研究科での半年間の講習は、研究員がそれぞれ報告書を書き上げて修了となるが、9月半ばからその講評にかかった [9.16～9.19]。10月に入所した第5期生にも引き続き講義を行った [12.3、

12.5～12.7]⁽⁷⁰⁾。

研究部は歴史科のほか国文学科・哲学科など計7科からなり、毎週金曜に全科合同の研究会を開催することとなっている⁽⁷¹⁾。西田は7月の全体研究会で「我国封建制度社会の発展と其精神」⁽⁷²⁾に関する発表を行い、12月の研究会では、同所助手の国文学者志田延義の神楽に関する報告を聞いた[7.6、12.7]。毎金曜に開催であるが、関心のあるものだけ出ているようだ。

ちなみに、国民精神文化研究所は一般に「精研」と略称され、日記でも見られるが[4.21]、ほかに「国研」[9.16～9.18]、「国精」[末尾予定一覧表8.27～8.30]、「国民」⁽⁷³⁾との記載もあり、表記は定まっていない。

4-2 全国各地への出講

精研所員の肩書きは、各地からの講演依頼を倍増させるものでもあった。そのうち聴衆数百名規模のものをあげると、2月に亀岡小学校（京都府南桑田郡）で「成人講座」[34.2.12]、7月は長野県下伊那郡飯田町[7.29、7.30]、引き続き静岡県浜松市の小学校に出講した[7.7、8.1、8.2]。浜松での講義後は、妻と実兄と合流し富士山麓へ東の間の休息を堪能した[8.2～8.5]。

その後の鳥根[8.21、8.22]、兵庫[9.28、10.29]、岐阜[10.22、10.23]、京都[11.9、11.10、11.15、11.16]、長野[11.26、11.27]の各講義は、府県に設けられた国民精神文化講習所の講習会への出講である⁽⁷⁴⁾。精研事業部の教員研究科が中等教育機関の教員を対象とするのに対し、言わばその地方版である道府県講習所は小学校教員を対象とし、毎年2,30人を選抜、30日程度の「国民精神文化講習会」を実施することを主な事業とした。

このうち兵庫県では、多くの府県が「講習所」と称するのに対し「国民精神文化研究所」と名付け、県立御影師範学校で8月から開始された講習会は

三ヶ月の長期にわたるといふ力の入れようであった。全県下選抜の中堅からベテランの主席訓導30名が寄宿寮で寝食を共にし、午前は聴講、午後は自由研究や課外講義という生活を送った。西田は20時間講義を行う予定で、「歴史学の進歩」について講じている[9.28]⁽⁷⁵⁾。11月初旬から約一ヶ月に亘って開催された京都府の講習会では、府下30人の小学校教員に対して⁽⁷⁶⁾「歴史学ノ傾向」「氏族制度」[11.9、11.10]について弁舌を振るった。

この他、実業家大倉邦彦が横浜市太尾地区（現港北区大倉山）に開設した大倉精神文化研究所にも出講している[10.26]⁽⁷⁷⁾。

京都から品川の精研まで特急「富士」や「燕」を使って8時間前後、信州や山陰へは10時間近くかかる時代である。時には夜行列車で帰洛し、午後から調査旅行に出かけるなど[7.7、7.8]、ハードスケジュールをこなす毎日であった。

小括

『日本文化史序説』刊行直前の西田は、国史専攻の学生の眼に「博士の意気は又旺んで〔中略〕近来若人の如く」⁽⁷⁸⁾に映っていた。1928年の日記には趣味のテニスを楽しむ様子が記され[28.4.28、5.26、6.9]、草野球で怪腕ぶりを発揮したというエピソード⁽⁷⁹⁾もこの時期のものである。少し後になるが、1936年に国史研究生として来学したエドウィン・ライシャワーは、西田を「並外れて快活な人」と回想する⁽⁸⁰⁾。

1930年代、西田は国史学講座唯一の教授として毎年20名前後の卒業生を出す大所帯を支えた。忌避されがちな学友会新聞部に積極的に関わり、学科を超えた連携や卒業生の交流を図るなど、さまざまな新機軸を打ち出した。繁務の中、各地の卒業生らと会を重ねているのが印象的である。この間、学内では評議員も務めた(1930.12～1933.12)。学外でも複数の仕事を抱え、東の黒板勝美に比肩

される存在になっていく。四十代半ばのこの時期、まことに意気盛んで力が漲っていたといえよう。

一方、1920年代後半から30年代にかけて、社会状況は大きく変化する。言論・思想の弾圧は左翼的なものから自由主義的なものに及び、学内でも学生の検挙が相次いだ。足下で起こる騒擾を前に、大学教員として何らかの対応の必要性を感じたことであろう。文部省のいう「思想善導」を是とし、現実的な対応を重ねていった時期といえようか。新聞部部长就任もこの点から捉えるべきだろう。精研入りにしても、研究面もさることながら、教育者としての職分を果たそうとの強い意志があったと思われる。ともあれ、34年の精研入りが西田にとって大きな岐路となったことは確かである。

33年の滝川事件が学問の閉塞的な状況を決定づけ、個々の教員の心理に陰鬱な影を落としたであろうことは、こんにち、より実感をもって想像できる。戦時体制下、反骨を貫いた人々の言動については繰り返し語られるが、そうではない人たちの「非常時」経験は、その体制加担が糾弾の的となるか、あるいは、たいして意味のないものとして、顧みられることが少なかった。しかし政治と学問の緊張関係の中であって、時代を覆う思潮からはみ出さない範囲で自らのなし得ることを見つけ出し、地位に応じて実践するという態度も、少なからず見られるはずである⁽⁸¹⁾。だとすれば、現実的な対応に迫られた先人の営みを丁寧に検証していくことも意味あることと思われる。こうした問題意識に基づいて、引き続き日記を読み解いて行きたい。

※本稿は、2016～2018年度同志社大学人文科学研究第10研究および、2019～2021年度同第9研究「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究—現場と公共性—」の成果の一部である。

[註]

- (1) 入山洋子「西田直二郎日記」(1)、(2) (『京都大学大学文書館研究紀要』18号、19号 2020年、2021年)。
- (2) 「文芸日記 昭和三年」(京都大学大学文書館所蔵「西田直二郎関係資料」識別番号：西田Ⅱ-28、以下同資料群については資料名と識別番号のみ記す)、「昭和四年 当用日記」(西田Ⅱ-30)、「学生ダイアリー 2594」(西田Ⅱ-38)。日記の全容は前掲「西田直二郎日記(2)」解説参照。
- (3) 「彙報」(『史林』14巻3号、1929年7月)。
- (4) 大括弧内は関連する日記の日付。以下同様。西暦は下二桁のみを適宜記す。
- (5) 松田利彦「京城帝国大学の創設」(酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014年) 120、122頁表。
- (6) 「田中梅吉先生略年譜」(中央大学ドイツ学会『ドイツ文化』21号、1976年)。
- (7) 米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究—鮮満旅行記にみるツーリズム空間—」(『京都大学文学部研究紀要』53、2014年)。
- (8) 武藤誠「一つの画期時代」(京都帝国大学国史研究室『国史研究室通信』21号、1935年11月)。
- (9) 「京都帝国大学史学科学生朝鮮見学旅行」(上)、(下) (『史林』14巻1号、3号、1929年1月、7月)。
- (10) 宮島新一『芸者と遊郭』(青史出版、2019年) 390頁。
- (11) 竹内好「鮮満旅行記(一九三二年)」(『竹内好全集 第15巻』筑摩書房、1981年)、小谷汪之『シリーズ日本の中の世界史 中島敦の朝鮮と南洋—二つの植民地体験』岩波書店、2019年。
- (12) 「南洋研究旅行日記」(西田Ⅱ-36)、「セーラン行のつゞき」(西田Ⅱ-83)。公表された旅行記として、「ジャバ旅行談」(史学研究会例会での講演) (『史林』18巻3号、1933年7月)、西田直二郎「南洋の自然と人」(西川一草亭編『瓶史』昭和八年夏の号、1933年7月)がある。ただし、「この土地の風物はわれ—日本人にとつては懐かしく思はれる〔中略〕豊かな土地でありますから日本の練習艦隊の若い将官などが上陸しますと、日本はなぜかう云

- ふいゝ所をとらなかつたのかな、と云ふ様なことを放談し乍ら歩いたりして居る」（『南洋の自然と人』5頁）のように、帝国意識むき出しの関心である。
- (13) 蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について一関西民俗学の黎明一」（『京都民俗』19号、2001年）。
- (14) 以下、記録撮影事業については齊藤利彦「京都文化史学派と民俗芸能撮影の系譜」（『藝能史研究』206号、2014年7月）参照。
- (15) 野間宏ほか編『竹内勝太郎全集 第1巻』思潮社、1967年、525頁。
- (16) 「彙報」（『史学雑誌』39編7号、1928年7月）。
- (17) 「京都市史編纂経過」（京都市歴史資料館所蔵「京都市史編纂事務局関係文書」文書番号5）
- (18) 〔無題〕（西田Ⅱ-27）。
- (19) 同上。
- (20) 同上。
- (21) 「はじめの言葉」（前掲『国史研究室通信』1号、1931年12月）。
- (22) 木村武夫「三浦先生の送別会」（京都大学文学部読史会『回顧五十年』1959年、24頁）によれば、三浦退官間際の1931年春、西田は当時国史2回生の木村に「読史会は三浦先生の会だから」と洩らしたという。
- (23) 原随園「回想」（京都大学文学部編『以文会友—京都大学文学部今昔』京都大学学術出版会、2005年）192頁。
- (24) 前掲「西田直二郎日記（1）」1913年1月25日条。
- (25) 『京都帝国大学新聞』195号、1934年1月21日。
- (26) 『京都帝国大学新聞』196号、1934年2月5日。
- (27) 『京都帝国大学新聞』201号、1934年5月5日。新聞記事では京都支部の発会は13日とされる。
- (28) 同上。
- (29) 前掲『国史研究室通信』16号、1934年10月、5頁。
- (30) 京都帝国大学文学部『京都帝国大学文学部三十周年史』1935年、139～154頁。
- (31) 『京都帝国大学新聞』207号、1934年9月21日。
- (32) 「大学週間」、「研究風聞」（前掲『国史研究室通信』16号、1934年10月）。
- (33) 「文学部三十周年記念」（前掲『国史研究室通信』20号、1935年11月）、「彙報」（『史林』22巻1号、1937年1月）。
- (34) 『史林』22～25巻各1号（1937～1940年各1月）。
- (35) 前掲「西田直二郎日記（2）」1926年12月4日条。
- (36) 前掲「西田直二郎日記（2）」解説参照。
- (37) 龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻、2000年、652～660頁。
- (38) 京大新聞史編集委員会『権力にアカンベエ!』（草思社、1990年）26～40頁。
- (39) 京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史総説編』1998年、360～361頁。
- (40) 〔無題 昭和二年用手帳〕（西田Ⅱ-26）。
- (41) 前掲『権力にアカンベエ!』59頁。
- (42) 前掲『権力にアカンベエ!』61頁。
- (43) 『京都帝国大学新聞』210号1934年11月5日、213号1934年12月21日、214号1935年1月10日。
- (44) 原随園「回想」（前掲『以文会友—京都大学文学部今昔』192頁）、同「人間嫌い」（同112頁）。
- (45) 西田直二郎・西彦太郎共編『近畿・京都』近畿協会、1928年11月、131頁。
- (46) 前掲『近畿・京都』、西田直二郎・西彦太郎共編『京都巡覧の栞』近畿協会、1928年11月。
- (47) 前掲『近畿・京都』所収。
- (48) 「序」（前掲『近畿・京都』）。
- (49) 「地下から発掘したみかの原離宮の跡」（『東京朝日新聞』1928年2月7日付）、佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」（『古代学』6巻4号、1957年12月）。
- (50) 滋賀県保勝会『滋賀県史蹟調査報告 第二冊 大津京趾の研究』1929年。
- (51) 卯田卓矢「昭和初期の比叡山における観光開発と自然保護—「聖地と自然保護」の関係に注目して」（『名桜大学紀要』24号、2019年3月）、「雑報 比叡山に明治節記念櫓建設反対」（史蹟名勝天然記念物保存協会『史蹟名勝天然記念物』3集11号、1928年）。
- (52) 京都府『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第15冊』1934年。
- (53) 「序」（西田直二郎『京都史蹟の研究』吉川弘文館、1961年）2頁。
- (54) 中村武生「京都三宅安兵衛・清治郎父子建立碑

- とその分布—大正期及び現京都市域を中心に」(花園大学史学会『花園史学』22号、2001年)、同『三宅安兵衛遺志』碑と八幡の歴史創出」その1～その10(『会報』70～76、79、82、83号、2016年1月～2018年1月(「八幡の歴史を探究する会」<https://yrekitan.exblog.jp/> 最終閲覧2021年12月16日))。
- (55) 博物館事業促進会『博物館研究』2巻1号1929年1月、2巻2号1929年2月。
- (56) 北川央「大阪城天守閣」(『歴史科学』157号、1999年7月)、大阪城天守閣復興三十周年記念事業実行委員会『大阪城天守閣復興三十年史』1961年。
- (57) 森正人「節合される日本文化と弘法大師—1934年の「弘法大師文化展覧会」を中心に—」(日本地理学会『地理学評論』78巻1号、2005年1月)。
- (58) 同上。
- (59) 日本古文化研究所編『日本古文化研究所事業報告 自昭和10年11月至昭和11年10月』1936年。
- (60) 同上。
- (61) 長谷川亮一『「皇国史観」という問題』白澤社、2008年、133頁。
- (62) 紀平正美「十年間」(国民精神文化研究所『国民精神文化』8巻9号、1942年10月)29頁、荻野富士夫『戦前文部省の治安機能』校倉書房、2007年、92頁。
- (63) 柴田實「西田直二郎」(日本民俗文化大系10『西田直二郎・西村眞次』講談社、1978年)46～48頁、前掲原随園「回想」193～194頁。原によれば、浜田の反対理由は研究所の性格に関わるものではなく多忙すぎるので本務に力を入れて欲しい、ということだったという。
- (64) 前掲柴田實「西田直二郎」、47～48頁。
- (65) 「昭和九年」(西田Ⅱ-40)。
- (66) 所員の多くが同所発行の報告書・パンフレット類を多数刊行する中で、西田にはその種の著作はなく、門下生とともに専ら資料集の編纂に注力した。西田の精研での研究活動については稿を改めて考えたい。
- (67) 国民精神文化研究所『国民精神文化研究所々報』4号、1934年5月、111頁。
- (68) 小野正康「教員再教育の十年回顧」(前掲『国民精神文化』8巻9号)98頁、前掲『国民精神文化研究所々報』4号、120頁。
- (69) 前掲『国民精神文化研究所々報』6号、1934年11月、117頁。
- (70) 同上121頁。
- (71) 前掲『国民精神文化研究所々報』7号、1935年2月、126頁。
- (72) 前掲『国民精神文化研究所々報』4号、114頁。
- (73) 「昭和九年」(西田Ⅱ-40)の11月29日～12月5日欄に「国民」の記載が見られる。
- (74) 「国民精神文化講習会実施状況」(文部省思想局『思想時報2』昭和10年3月(思想調査資料集成刊行会『文部省思想局 思想調査資料集成24巻』日本図書センター、1981年))。
- (75) 「兵庫県立国民精神文化研究所便り」(前掲『国民精神文化研究所々報』7号)。
- (76) 前掲「国民精神文化講習会実施状況」(『思想時報2』)。
- (77) この時の講演は、『日本精神講習会叢書 第15輯 西田直二郎「日本精神と日本文化」』(大倉国民精神文化研究所、1935年)に収録されている。
- (78) 前掲『国史研究室通信』1号、19頁。
- (79) 中村一良「蕉梧」(前掲『回顧五十年』)23頁。
- (80) エドウィン・O・ライシャワー『ライシャワー自伝』文藝春秋、1987年、106頁。
- (81) この点については藤田正勝『人間・西田幾多郎』(岩波書店、2020年)第10章等から示唆を得た。

凡例

- ・当該年の日記帳3冊の全翻刻である。
- ・日記帳にあらかじめ印字されている文字はゴシック体で表した。
- ・「予記」欄および本文罫線から意図的にはみ出した記載については【 】で括弧した。ただし、本文の続きを予記欄や欄外に記す場合は、断りなくそのまま本文に続けて入力した。「発信」「受信」欄の記載はそれぞれ【発信】【受信】とした。
- ・〔 〕内は翻刻者による注記である。
- ・人物については、学会報告や肩書き等から判明した

人名、および交友関係・前後の文脈から推測しうる人名を、原則として初出箇所に傍注した。京都帝国大学在学中の人物や直近の卒業生については、必要に応じて学科または専攻、入学・卒業年（西暦1900年代の下二桁）などを補足した。

- ・旧字・異体字は原則として正字に直した。固有名詞についてはこの限りでない。「竜／龍」「跡／蹟」の使い分けは原史料通りとした。
- ・仮名遣い・濁点の有無は原史料通りとした。意味が通じにくい箇所には傍注を付した。
- ・適宜、句読点を付け改行を詰めた。
- ・判読不明の文字は字数分を□、字数不明のものは〔 〕で表した。
- ・原史料中の欠字は該当箇所に〈 〉を記載した。

文藝日記〔昭和三年〕

一月一日 日曜

うらかなお正月だ。風もない。起きればゆるく日射が東の窓より這入つてゐる。今年の平和な春か已に来てゐる。

午後四時頃、大島徹水師来る。

一月二日 月曜

支那人陶氏来る。昼飯出す。午後市原琢磨氏来る。

〔和男〕肥後君〔国史27卒〕のことにつき話し。

夜、原弘二郎氏〔西洋史27卒〕来る。年賀状をかく。

一月三日 火曜

午前年賀にまわる。近所に廻り、恒藤恭、石川興二氏に廻る。金曜日出席されたる礼を述べるためなり。二時かへる。菅原氏夫人来られたり。夜、菅原氏宅カルタ会。予在宅、年賀状八九十枚かく。十時臥。

一月四日 水曜

夜、買物に行き電気ストーブ買ふ。物産館の陳列を見る。辰の年百態などあつて珍奇なものを陳べてゐる。戸田隆介氏そこにあり。

一月五日 木曜

起き出ずること早きを欲して眼覚し時計をかける。夜まだあけず、湯に行く。書齋にストーブを入れて書見する。天気もよく心地よし。午前文化史、午後同じ、夜少しかくのみ。十時半やめ、内田様手紙かく。十一時になる。

一月六日 金曜

朝早く起きて湯にゆく。昨日より始めた早起きは新年らしく心地よい。凍りついてゐる土地を踏み湯に行く。田舎びたる此あたりの家の立ち工合、道、疏水の流れも冬景色か持つ特有の味をあらはしてゐる。

けふは客の多い日である。

朝、文化史を少しかく。間もなく鹿ヶ谷奥村氏来る。筆をとる最中なれば出でず。暫くすると電灯工事のもの来る。電熱器の工合などいろ／＼注意する。奥村氏と共に昼食し、間もなく又、安藤徳器君〔国史28卒〕来る。其間に寺尾宏二君〔国史29卒〕来る。安藤氏帰る後、市原母及令嬢来る。夕方近くなる。大西母来る。夜になりて木島誠三君〔国史27卒・和歌山県師範学校教諭〕来る。和歌山の須田神社の大鏡和文年銘あり。和歌山学校（旧幕時代の）の話聞く。安藤氏ハ岩国学校及養老館のこと話す。此地より〔筆〕河上、〔嗣郎〕河田、二氏出で、〔博〕末川氏も奥様は大塚武松氏妹の由にて皆岩国出身。〔翼〕江木、井上光、長谷川氏等出ず。

二月二十日 月曜

千本西のところ発掘。基壇を発見する。夜、松井大毎記者来る。

三月四日 日曜

夕方ラワン材家具展を六角会館に見る。

論文審査に忙しい日つゞく。

三月六日 火曜

一日在宅。菅公伝。論文審査。

三月七日 水曜

十一時頃大学研究室に行く。午後二時頃に山階宮藤麻呂王、陳列館を来観せらる日につき行く。三時半来学。考古学陳列室、国史陳列室、貴賓室、古文書室観らる。五時半帰らる。宇佐美大朝記者来室。桃山文化講演会のこと頼み置く。

三月八日 木曜

朝、筆をとる。午後天気よろし。西川一草亭の插花時代別の展覧会を寺町美術倶楽部に見に行く。大藤博士と道にて一所になり共に観覧する。帰りに市役所に行き、地理課長の三原氏、都市計画の長尾正之氏と談話して助役と共に実地検分することを約束する。

夜、菅公伝。論文審査、岡本其他三篇を明日事務に廻さんとす。

三月九日 金曜

朝、菅公伝。

午後、史学科打合会。

在外研究員の件。

^{〔実繁〕}小牧講師を推薦すること。^{〔利貞〕}那波氏は来年に東洋史より推薦せんとする意志あること。

史学会大会。

^{〔周行〕}三浦教授出講之こと。^{〔澄〕}平泉助教授より手紙にて三浦教授宛、水戸義公のこと講演を頼み来る。本年ハ楽翁・義公の記念会を以て大会とすることの由。東京の史学会もこれではお祭ばかりになり学術的ならざるは日本の史学の研究機関たる職分を忘れてゐるやうに見える。

【夜、肥後來】

三月十日 土曜

雨ふる。豊楽院の基壇を市役所の岡田助役と見に行く日なれど、やめにした。

菅公伝筆をとる。けふにて終らんとす。午後筆を走らす。夕方池田源太〔23入・国史32卒〕来る。三高入学試験失格のことを云ふ。文学講座二冊借りて行く。日本文学に現はれたる庶民階級の話をする。夜、山田天満宮宮司来る。十四日浄書して渡すことを言ふ。十一時寝る。

四月六日 金曜

朝、岩国より帰り、寐る。午後又小睡。中外日出日報社鈴木氏来る。

四月七日 土曜

岡本、林良材〔開業医〕、手紙出す。朝手紙にてつふれる。

夜、池田氏来る。昼、池田夫人来る。

四月八日 日曜

朝早起。^{〔Heinrich Rickert〕}リッケルト読む少し。朝室片附、沐浴。午後小散策。^{〔大梁〕}富森氏来る。夜、読書。遅くなる。

四月九日 月曜

安藤氏手紙出す。

早起、リッケルト読む。手紙かく。十一時となるによりて約束の羽溪君の宅に行く。赤松氏と共に会食のためなり。十二時過赤松君来る。談話、朝鮮大学〔京城帝国大学〕のこと、速水氏十一日京都に来る由なり。^{〔文倉〕}手島氏任命は已に終ると云ふ。赤松君、今夜徳山に帰る。檀中総代なる徳山町長、自動車と汽車の衝突の為め横死のためなり。四時前羽溪君宅出で蕪庵に行く。森本陽明氏に道にて逢ひ、帰りて酒をよばる。蕪庵五時前出で、早水源五氏宅による。猪本氏のこと聞く為めなり。夜、岡本正蔵〔28入・西洋史31卒〕来、宿をきめる。下鴨なり。^{〔虎雄〕}佐藤君〔国史27卒〕来、史蹟調査報告の記

載の項目きめる。西崎善之助氏に手紙かき佐藤君に渡す。瓶原発掘日取十五日とするや否やのこと。龍大に時間割のこと電話にて交渉。金曜日だめたと云ふ。

天平文化のこと考按。

【電話、龍大、試験、山田、菅公】

四月十八日 水曜

午後四時半より教授会あり。共産党事件の報告、及河上教授辞職のこと。総長進退のこと、経済学部長進退のこと。

夜九時五十分の急行にて（臨時増発の汽車也）東京に行く。

四月十九日 木曜

朝、東京着。

一、内務省に行く。史蹟調査会の協議会のことについて也。

一、史料 岩橋君に会ふ。

一、内ム省 宮地直一博士に会ふ。

一、出発八時二十分京都へ。

四月二十日 金曜

朝八時半京都着。一旦帰宅、入湯。それより学校、講義する。国史（第一回）、史学研究法（第一回）、初めての講義す。

四月二十一日 土曜

大阪に行く。初めての講義。

宅による。西光氏逢ひたしと云ふので早くかへる。

しかし既に西光氏ハ来て、不在なりし故に帰りし後也。佐藤氏も来る。

四月二十二日 日曜

法隆寺史蹟踏査。雨天なり。間野氏ノ話、那波氏の話、予も又話しする。橋川氏等参会。神田氏は講話せず。内藤博士の新築の祝ありとて、中途よ

りこれに行きしなり。中村、岩井、鈴鹿氏等、内藤博士宅に行く由也。

此日寒くして風をひきさうなり。

四月二十三日 月曜

あさ早起。後少しやすむ。

四月二十四日 火曜

北野天満宮大祭一千二十五年大祭也。十時出で、参拜。平井久兵衛氏ニ逢ふ。十二時半より自動車にて龍大に行く。このごろの忙しさ例ふるにものなし。

四月二十五日 水曜

教授会、一時より。大学院入学のこと等。

女子大学院入学のこと問題となる。

評議員 浜田教授復任。

四月二十六日 木曜

午後講義。

特殊 古代文化 第一回。

演習 〃

池田氏来る。佐藤氏来る。

四月二十七日 金曜

講義。国史、史研。

夜、池田氏来る。文学講座のこと筆記。

飯沼氏、東京学士院に就任につき挨拶に来る。

四月二十八日 土曜

大阪。テニスをする。飯沼氏送別会、新三浦。

四月二十九日 日曜

天長節。学校にて服を更めて久世郡地方めぐる。

西村氏、谷口氏、池田、佐藤、鈴木。

四月三十日 月曜

あさ小睡。午後三時より史学科打合会。午後二時と三時の間、崑山会名画展を博物館に見に行く。夜、疲労あり。多飲暖。

五月一日 火曜

朝、読書、文化史。午後、龍大。

五月二日 水曜

一、文化史。リッケルト、原稿。

夕方、^{〔直勝〕}中村、^{〔亨〕}羽田氏共に^{〔昂〕}楽友会館にて坂口先生の記念事業のこと相談。十時かへる。夜一時まで読書。けふは落付きて勉強出来る。

五月十八日 金曜

講義する。

夜行にて長崎に向ふ。

五月十九日 土曜

長崎、午後四時着。

五月二十日 日曜

講演。

五月二十一日 月曜

出発。温泉ノ岳。高来ホテル。

五月二十二日 火曜

出発十時、島原十二時半発。三角、熊本、下関。下関九時ノ夜行。

五月二十三日 水曜

朝、京都着。

教授会。図書委員会。中井家記録、三浦教授説明。

予知らず。後に質問出ず。保留となる。

五月二十四日 木曜

演習。

五月二十五日 金曜

講義。

五月二十六日 土曜

大阪。

テニスする。

五月二十八日 月曜

勉強。

五月二十九日 火曜

龍大やすむ。

五月三十一日 木曜

けふやすむ。

六月一日 金曜

金曜日やすむ。

六月二日 土曜

大阪に行く日なれど休む。

六月三日 日曜

滋賀県の天津宮の発掘に行く。けふは先般発掘のつゞきをなし、錢にては富寿神宝、隆平永宝、寛平大宝を発掘する。其他礎石の出ること十七個、土塔四、五十個、大瓦平安初期のものあり。肥後、^{〔淳〕}小葉田^{〔貞彦〕}〔国史28卒〕、^{〔貞彦〕}島田、杉山藤太郎事務官、小学校長白子氏等一行。

六月四日 月曜

市役所にて贈位者につきての相談会。岡田助役、^{〔不二男〕}和田博物館長、^{〔通次郎〕}出雲路、林、木村得善、山本臨乗。午後までかゝる。大学に送りにて貰ふ。

民俗学会^{〔ママ〕}。

六月五日 火曜

龍大。

宇治に行く。十二時かへる。

六月六日 水曜

教授会。

村上直次郎氏送別、左阿弥にてする。^{〔直喜〕}狩野、三浦、^{〔出〕}新村、予。

かへり同攻会の島田、^{〔效〕}藤田、^{〔貞彦〕}小酒井氏に電車にて逢ふ。編纂会のかへりなり。十一時過かへる。

連日の会合と多忙の爲め閉口する。

六月七日 木曜

演習。

六月八日 金曜

朝、大学。国史普通講義、準備多くせずつかる。史学研究法、史学の性質を話す。^{〔豊宗〕}源氏の美術史の会あり。夜、平安朝貞観時代。

六月九日 土曜

大阪に行く。曇りたれとも後晴る。けふ大阪高等学校とテニス試合。女子専門は散々にまける。宅により五時頃出で、八時過かへる。肥後氏来りあり。発掘は昨日中村氏一行により故意にくずされたる如き形跡ありとて憤慨してゐる。

六月十日 日曜

朝、大掃除の日なり。掃除のことは手伝はず、少し法性寺かかんとす。少しかく内に昼となる。午後、丹羽圭介氏宅に行く。瓦拓本写真をとる。北野宮司山田氏、丹羽氏宅に来る。夕食御馳走になる。夜まで居る。十時頃かへる。風邪気味あり。

六月十一日 月曜

朝、文化史序論のためリッケルト読む。昼まで。

午後、柴田実氏〔国史30卒〕に逢ふため、研究室に行かんとするとき、富山県米沢元健氏来る。講習会のことなり。三時前まで話し研究室に行く。浜田教授に米沢氏を逢はす。

けふは家政女学校〔家政高等女学校〕にて話しをする日なれとも、風邪の気味あり身体苦し、遂に断り明日として貰ひて寝る。

六月十二日 火曜

朝。

午後、龍谷大学。四時過にてやめる。帰り、地図などそろへて家政女学校の学術講演会に行く。林彦明氏に逢ふ。講演、唯識のこと也。余の講演は最近の発掘事業のことなり。八時半過より十時まで。十一時出で、富森氏と共にかへる。十二時なり。

六月十三日 水曜

朝、学校に行く。贈位者のことなどにつき、柴田実、西堀一三氏〔国史31卒〕外二君の報告を聞く。かれこれする内中食時となる。けふは会食の日なり。大学院学生も参加する。各自自分名紹介する。教授会、簡単。訓育費のこと反対あり。但し訓育施設をなすことについて考慮することの報告あり。共産党事件のもの二名放学のこと、但し発表せず父兄にのみ通知すること。図書委員会、中井家記録のこと審議。遂に不採用。仏文学の超過金を五百円ほど共同資金より助くることとなる。

池田氏来る。大工尾崎来る。池田氏十一時頃まで話す。それより贈位者のもの見る。睡むたし。講義のこと少し調べんとする。^{〔Wilhelm Wundt〕}ヴント読む。

六月十四日 木曜

朝、市役所佐野直穂氏、贈位者の伝記とりに来る。藤井、柴田鳩翁、狩野元信、土佐光信、高橋宗直、

等七名ほどの分渡す。

講義準備する。宅にて。三時より講義。舞踊ノ事。わさおきの事話しする。夜食後少睡せんとす。連日の労のためそのまゝ寝。

六月十五日 金曜

五時半起く。市役所より贈位者の伝記残部とりに来るにつき、昨日わたさざりし分訂正する。案外時間をつぶす。一つのものに一時間以上費すものあり。漸くにして八時過、八名ほどのもの訂正。食事すると佐野氏来る。これを渡す。九時也。けふの講義下準備せんとしたが前記のもの余り急きたるため疲れ、午前中講義休む。其旨通知。史学研究法の準備せんとしたれとも読み得ず、連日の疲労漸く甚しきを知る。^{〔定慶〕}井川氏より電話。隠岐島の講習会のこと催促。十二時半まで待つことを言ふ。午後一時研究室にて井川氏及二氏に逢ふ。講習会のこと断りたきことを言ふ。史学研究法講義する。リッケルト論を言ふ。文化史序説講義の一部を言ふ。三時講義済み、川端道喜の家に行き古文書見る。六時過かへる。夜かへる。散歩。早く寝んとす。疲労を休む必要あり。けふ大夕立。梅雨の初めての雨なり。

六月十六日 土曜

晴、大分久しく日記をかゝず、いそがしく日がたち行くことに驚く。思ふやうに事の運ばぬも心外なれど何とも致しなきやうである。けふは早起。きのふは夜疲れたるやうに思ひしか、朝はめざましも聞えぬまで寝たり。急ぎ用意して大阪に行く。電車にては誰れも逢はず。京都市内は植物園より四条大橋電車。宅出でたるは八時十三分前。八時に植物園出る。八時二十三分に四条大橋、八時三十分の電車、九時四十分天満橋、市内電車（バスは来らず）^{〔ママ〕}八時四十五分より、阿倍野橋十時十分過上町線、十時二十分帝塚山着。二十五分授業開始。一時半学校出、二時宅。二時

半宅出、三時十分前天満橋出、中書島三時四十五分、七条四時十分、宅四時四十五分、五時十分湯、五時三十分かへる。五時四十五分家出で六時二十五分^{〔乙男〕}京都ホテル藤井博士還暦祝賀、参会約百四十名。史学教官、三浦、中村両氏欠席。九時帰宅、羽溪君一所也。原稿少しかゝんとす。

〔挟み込み紙片一省略〕

八月二十六日 日曜

午前、原稿。午後、法金剛院に行く。佐藤虎雄君同道。法金剛院の十一面観音の体内より出でたる古文書を見んためなり。

八月二十七日 月曜

朝、此日出発せんとして、今日中にし上げる用事を考へる。富森氏来訪、十時頃なり。午後、用事整理。七時二十五分の汽車にて洪に向ひて出発す。名古屋までハ急行なり。十時半頃名古屋着。名古屋にて切符を買ひ、湯田中に行のる。汽車中にてはよく寐る。けふの夕は修学院に^{〔田〕}大目踊のある日なり。妻見に行く。民俗談話会主催なり。

八月二十八日 火曜

長野にて少憩、七時四十分過の湯田中行き^{〔ママ〕}の電車あれど一つ遅く^{〔ママ〕}られて八時二十五分のものに乗ることとし長野の町にて朝食をとる。長野の町は大通には街路樹ありて風の涼しきところなり。^{〔蕎麦〕}そばの名物なれば朝の食事にそばをつけてもらふ。しかし其味よからず。朝、洪温泉、もとやは満員なれば、もとやより口を^{〔和〕}聞きて橋のたもとなる井筒やにとまる。階下の室にてうすくらし。午前少し睡りをとる。午後こ

れにて伏しなから原稿かく。文化史、奈良朝。夜、電灯の球をとりかへてもらひ明るくして書を読む。

八月二十九日 水曜

朝早起。六時家を出で、河原を上りて自然の岩の間にたゝへたる温泉に浴しに行く。人一人浴しあり。けふは室は昨日のほりにて鬱陶敷ところなれば、こゝに居ては原稿もかけざるやうに思はれし故、上林に行きて書を読まんとなす。上林温泉に向ふ。九時。

上林温泉の仙寿閣にて室一つを借りてこゝにて原稿整理する。上林は涼しければよく仕事できしこと喜びなり。かへり湯に入り、夜は少しつかる。かへればけふは井筒ヤの二階の室あきたればこれにかはる。西に山を見、南に河をへたてゝ林を見る。風とほしよし。よき室なり。十一時臥床したれど余り書を読みたるか寝つかず、一時過ぎまでまどろみかねた。

八月三十日 木曜

朝早起。河原の不動目洗の湯に行く。心地よくなる。睡眠不足の感もなくなる。九時頃散歩し、新聞ヤにありし新聞かひ来る。新聞読みて後、仕事。午後。

八月三十一日 金曜

朝五時半より湯に行く。人居らず、心地よきこと類なし。宿の部屋かはる。もとヤに入る。こゝは東南の角にて二階なり。下は自動車がまかる故にやかましこと第一なり。前より覚悟してゐること故、大したこととも思はず。午後、湯田中郵便局に行く。大阪女子専門学校に明一日休講の電報うつ。かへれば夕立。夕食後、涼しければ少睡。十時頃目覚めたれど、あまり疲れたるを以て臥床。

九月一日 土曜

渋温泉にあり。晴れたり。朝早く起きて河原にある湯に行く。原稿。頭痛の気少しあり。午前仕事。

午後は昨日のことある故、食後仕事をやめて散歩。河原を上りて行く人の後に随ひ行き、遂に上林に至る。せきヤにて少憩する。階上より落合太郎講師降り来ると見、奇遇に驚く。発哺の湯に七月より来てゐたと言ふ。明日は帰京の由。帰れば夕食。夕食後、読書、仕事。十一時までする。

九月二日 日曜

午前、散歩。仕事。新聞買ふ。朝日及信濃毎日。午後、京都府のこと読む。夜、史蹟研究原稿訂正。夜十時湯、十一時臥。

九月三日 月曜

朝五時半起き、大湯に行く。七時渋出発。長野九時十五分、名古屋六時二十五分、途中大夕立。名古屋六時五十分出発、京都十一時二十分着、帰宅。

九月四日 火曜

朝、大学。史林編輯会。

黑板氏手紙出すこと。

大会のこと、羽田教授意見聞くこと。

十二月中旬頃とすること。

途中に八幡西村氏〔芳次郎〕来る、面談。

一、乙女塚発掘のこと。

二、相楽郡標石立つること。一日巡遊のこと。

三、称名寺再調査は附近真宗寺院ノ調査のこと。

四、古墳地買得につき反対するものあり、保存上より説得すること。

五、泉橋寺附近標石立つるところを列記すること。

六、西村氏庭園保存のこと、武田五一博士に相談のこと。

夜、池田夫婦来宅。

〔雅二〕
【岸本君より□□ノ発掘ノこときく。井川氏乙訓郡史さいそくのこと】

九月五日 水曜

朝起き、文化史少し見る。

午前中、書斎移転を少しせんとす。几上ひきちらけてあるため読書も十分ならぬため片付けて仕事を便にせんとす。つひ十二時までしてしまふ。

午後一時、鶴巻鶴一博士〔前京都高等工芸学校校長〕来訪。郷里、新潟県南蒲原郡の所有地に古墳あり。高倉宮の墓なりと云ふ伝へあり。これを発掘さして呉れと云ふもの出で来たり。如何にすべきかのことに相談なり。葡萄酒到来。

市役所地理課の〈 〉穂〈 〉及び伊藤古義堂の〈 〉氏来。伊藤家書類整理につきての相談。四時頃、浜谷氏、村上氏来、名勝記のことなり。夕方まで話し六時過帰る。けふ歴史と地理の編纂会あれど已に遅し。少し用事もしたければ行かぬこととす。中村氏電話、講演会のこと、大阪朝日の希望を云ひて置く。

九月六日 木曜

朝、読書。食後書斎整理。

午後、物産館戸田隆介氏来、大典号を物産館より出すこと、原稿依頼。

井川定慶氏電話、渡辺氏来京のこと。

岩橋小弥太君来訪、夕食、十時まで話す。

宇佐美氏電話、十六日講演会のこと。

九月七日 金曜

午前、府庁の案内の総叙のところを見る。

十時より大学研究室に行けり。渡辺、畑中氏〔共に乙訓郡誌編纂委員〕乙訓より来る。井川君の乙訓郡史督促のことなり。昼食を教官食堂にてとる。

一時過かへり、部屋かたつける。四時、武藤、佐々木学生〔共に国史30卒〕来る。朝鮮旅行準備のこと相談のためなり。

五時過、西彦太郎氏に逢ふために木屋町西村屋に行く。十時過まで話しする。近畿協会の発展のために尽さんとす。明日魚澄氏に逢ひ近畿の案内を

つくることを頼まん。

【渡辺氏。西彦太郎氏】

九月八日 土曜

朝、女子専門学校に行く日なり。汽電車中読書。隠岐の話をする。一時間会津松平容保の話をする。この次には試験することを告ぐ。

明治天皇御集に現はれたる時世。

昭憲皇太后集について。以下。

魚澄氏に近畿案内記依頼。牧野氏のところに行く。堺市役所の水道課の階上にある。あつきところなり。五時半三条着。電車中、池田氏の文訂正。六時土居光知君の入浴によりて晩餐会なり。榊教授も出席する。伊津野氏〔文学部書記〕世話。

【大阪女専／図書館】

九月九日 日曜

朝、池田氏京都の彫刻訂正。九時山根君〔国史27卒〕来る。市役所の人と共に伊藤家に行く。仁斎、東涯、蘭嶋等のもの見る。一切のもの一覽。

淳和院の遺跡地に行く。何もなし。

夜、府庁統計課の人来る。総叙渡す。

向居敦郎君〔国史30卒〕来る。十時頃まで話す。

けふ朝、原稿、都ホテル西彦太郎氏に廻す。

【伊藤家】

九月十日 月曜

【京都図書館／知事招待】

十月十二日 金曜

後三時半より五時半まで講義。かへりて湯をもらひ、名越君のところに行く。七時を過ぎたり。荻山氏に逢ひ食事。一時頃まで話しをしたり。

十月十三日 土曜

けふは午後四時間の講義。午前中準備等。牧野君序文〔牧野信之助『武家時代社会の研究』刀江書院、

1928.10] のこと。午後四時三十分講義すませて、大学病院前の停留所にて齋藤秀三郎氏に逢ふ。経学院まで散歩。それより妻と共に大学病院前より本町散歩し、齋藤氏と共に江戸川に行き鰻を食ふ。本町散歩、かへり序文かく。

十月十四日 日曜

午前序文。牧野氏への文かく。かき上げんとして急かしき思ひをすることよ。十一時五十分の汽車にのるために、大急にて十一時十分頃家を出る。水原に行くためなり。水原駅は朝鮮式の建築にて一寸面白し。八達門より華虹門に至る。自動車なり。賃二十銭。華虹門より〈 〉宮に至る。四時三十分の自動車にて八達門より駅につき五時十七分発、七時十五分帰京。夜沐浴。

十月十五日 月曜

博物館に行かんとしたか講義の〔が〕ことにより行くを得ず、三時大急きにて家を出で大学講義。五時半まで。五時半より帰家。六時に〔松浦鎮次郎〕総長招待の朝鮮ホテルの会あり。六時半に行く。少し悪かった。十時過散会。骨董家池内に寄る。大学にて矢野教授の手紙受取る。

午前池田源太氏、近畿協会、肥後氏の文依頼のこと、目黒書店への〔月溪〕勝峯氏の著作出版のことにつき手紙かく。立川氏へはがき、奈良漬の御礼。

十月十六日 火曜

午前、講義準備。十一時急き終りて李王家次官篠田治策氏にあひに行く。旅行団李王家秘苑等拝観のための挨拶に行ったのである。門衛の巡查の取次にて電話にて事務室に通して都合ききたる後、門内に入るを許す。こゝは嚴重なところと見える。門内には、紅葉うつしく色どる。内に入りて待つこと少時、篠田氏に面会。体格よき健康さうな人である。二十四名一行のこと、秘苑と仁政殿を特に参観のこと依頼。浜田博士の話など少時して

帰る。

高陽軒にて食事。初めてである。講義前、加藤灌覚氏に逢ふ。講義後、田中梅吉氏に逢ひ、久闊を叙す。

其後総督府に行き、視学室にて高橋浜吉氏に面会、旅行のこと依頼。小杉氏〔が〕係りなるにより面〔会〕、総督府庁舎を出で南大門まで歩〔ママ〕る。夕六時荻山君招待にて其家に行く。名越夫婦一処なり。十二時前まで話す。道子風邪気味。

十月十七日 水曜

【朝、京城神社の祭りを見る。行列は面白し。朝鮮人の樂人もあり写真とる】

朝、帰洛の用意などせんとす。晴天にて心地よし。午後博物館見物をせんとす。李王家博物館も見たく思ひしか、時間の都合、明日学校に行くとき見ることしと総督府博物館に行く。四時まで観覧。少しゆっくり見るを得た。

藤田亮策氏を訪問したれとも、固よりけふは休日とて出館せず。用事も多きこととて四時閉館後南大門辺まで徒歩。大漢門を見る。帰れは丁度黒田幹一君訪問のところなり。暫く話しする。其内平壤中学校長鳥飼生駒氏来訪。平壤のことにつき注意あり。宿のこと依頼したるにつき、三根旅館に依頼しありと云はる。大同館に満鮮旅行案内所より通知せざるやを考へたり。

本願寺別院によりて本日二十一名京都出発したることを言ひ置く。道、けふ朝より風邪、午後臥床。

【博物館。〔義重〕戒能校長】

十月十八日 木曜

朝早く李王家博物館に行かんとしたれども能はず。午後講義二時間。けふにて終る日なり。家にかへりて食事する。やかて朝鮮旅行の史学科一行のつ〔が〕く時間となれば、急き停車場に行く。出迎として藤田亮策、小泉、名越、〔龍〕今西、〔文倉〕手島氏来る。

電車にて本願寺につく。けふは京城神社の祭礼の

第二日にて本町通は人を以てうずつまる。学生達見物にも最もよきときなり。

十月十九日 金曜

朝八時半出発。南山本願寺別院の朝鮮鐘を見る。それより本町に出で鮮銀前の広場より総督府に向ふ。九時半。それより博物館〔総督府博物館〕、総督府、慶会楼にて食事。後苑を見、京城神社、李王家、仁政殿、秘園〔宛〕を見る。博物館〔李王家博物館〕は遂に見るを得ず。夜出発用意し遅くまでなる。

十月二十日 土曜

李王家博物館、経学院。予は大学に行き挨拶する。自動車にて奎章閣。又自動車にて図書館〔総督府図書館〕。一時出発、平壤に向ふ。午後九時につくべき汽車、沙里院にて前の列車が脱線したりと云ふ報をうく。沈村に至りて遂に列車立往生となる。一時頃黄海黄州まで行く。徒歩連絡にて平壤に行き得べしと云ふにより汽車を下り暗夜をカンテラの火に照されて徒歩する。寒さ身に沁む。黄州駅にては火の気もなし。駅長室に行き煖をとる。西洋人三人あり。女は遂にバイオリンをひき駅員に叱らる。混雑甚し。空腹と寒さに苦しむ。二時頃汽車来りて乗る。ストーヴを汽車中にてたく。ようやく燃えて温まる頃平壤につく。自動車にて大同館に入る。皆疲労する。三時なり。三時半臥床。

十月二十一日 日曜

五時めさましにて起き湯に入る。寒さもひどく時間少なく睡眠は十分ならず。心地よからされど元氣出して用意し学生諸君を起し廻る。皆蹶然として起き、寒気身に沁む内を自動車にて駅に行く。夜未だ明けず。駅には已に人多し。一番列車にて岐陽に向ふ。汽車中にて朝食する。湯気の立つ茶の湯がバケツに入れあるは実によろし。岐陽より

は西に行く。自動車、朝風冷たし。十時までに皆かへる。岐陽より平壤にかへる。未だ昼飯前なり。之より楽浪に向ひかへりて一時過中食。博物館〔平壤府立博物館〕、牡丹台、乙密台、之より川を下りて南大門〔大同門〕に行き、妓生学校を見る。夜市中見物。栗を岩橋、立川氏に送る。

十月二十二日 月曜

朝五時二十分の汽車にて平壤立ち、開城に十一時着。中食、其より〔じんせい〕蔘精製造場、〔満〕万月台、善竹橋、松陽書院を見、四時十分出発。七時京城着。楼上夕食。十時半発論山に向ふ。二等寝台。

十月二十三日 火曜

午前五時論山着。暗し。郡守出迎をうけ、あけやらぬ闇をついて三台の自動車は直走せに走る。扶余の松屋に行く。夜未だあけず、とぼしみもるゝ松屋をおこし食事を依頼して山を登る。山上より錦江と白馬江を見る。霧靄深くとどして水流その間に隠見する絶景なり。やかて日出づ。川を下りてやどに帰り朝食。食後、平百濟塔、水北亭を見、扶余出発、論山の弥勒仏を見る。十二時出発、五時大邱着。

十月二十四日 水曜

大邱、朝十時出発。其前に市田医学士〔次郎〕の家につきて集蔵品を見る。午後一時慶州着。諸鹿氏〔典雄〕の出迎をうけて博物館〔総督府博物館慶州分館〕を見、三時より近郊見物。鷄林、月城、芬皇寺、四面石仏、日くれてかへる。夜古物店見る。

十月二十五日 木曜

慶州。午前八時出発。徒歩、鮑石亭、三体仏。かへりて武烈王陵、或車は金庚信墓を見る。四時の汽車にて仏国寺。仏国寺駅より直ちに掛陵に行く。日暮れんとす。仏国寺ホテルに入る。月明。

十月二十六日 金曜

朝未明五時起床。石窟菴。日出ず。遠く海波を見る。壮快いはん方なし。かへりて大雄殿、塔見る。十二時出発、蔚山に向ふ。二時蔚山。蔚山城見物。釜山着。五時前也。釜山市中見物。連絡船。

十月二十七日 土曜

朝下関。夜十時かへる。三浦教授東京出発、荻野仲三郎氏にも逢ふ。

十月二十八日 日曜

朝沐浴せんとし、^{〔本箱カ〕}□□やに行く。かへれは^{〔は〕}岩波書店主人来る。来客多し。

十月二十九日 月曜

朝、風呂をわかつ。午後よく寝る。

十月三十日 火曜

午後、龍大に行く。疲労あるを知る。

十月三十一日 水曜

午前十時頃食事終りて大学に行かんとす。東京の小林勇三氏来る。大学に行くにより一所に出で、大学に向ひ行く。途中勝峯氏に逢ふ。共に大学に行く。会食。出席者少数。教授会。奉送迎に関する件附議。学生と共に教授が奉迎送するにつき、教授は学生と共に御苑内に行くべきや、或はこの方は凡て学生主事に任せておくやにつき論あり。結局、浜田教授は学生と共に行くことになる。小生も学生と共に行くべきことになるやと思はる。事務室にて田中一三氏〔国史29卒〕のこと調ふ。東北の中村善太郎氏に報告の為め也。採点を早く出すべしとのこと。

写真室に現像にやる。

中等教育改善についての意見交換会あり。^{〔重直〕}小西、^{〔仁一〕}矢野、^{〔新藤〕}新城、^{〔出〕}新村、^{〔虎雄〕}鈴木、^{〔隣藏〕}桑原、^{〔憲次〕}石田等あり。

夜俵兵次郎氏来。天満神社の揮毫を頼む為め也。

十一月二日 金曜

来訪。坂口令嬢、^{〔石山〕}浜□、谷、岡島。

十一月六日 火曜

けふ^{〔志〕}滋賀宮跡見学のところ中止。

十一月七日 水曜

雨ふる。昨夜より降りたる雨は夜中時々雨の音をはげしく立てゝゐた。

けふは聖上京都御着の日である。昨夜は十時頃には烏丸通は人を以てうづまると云ふさまであった。

十一時半自動車を以て停車場に奉迎に行く。山田、^{〔達朗〕}小田川両教授とともに車を備ふ。二時御着、二十分御休憩の後、京都駅御発輦、鹵簿整然として時に雨上りの道を行かる。四時頃かへる。雨しきりにふる。途中自動車多く、予の自動車の車輪より水はねを上ぐるに道行く盛装の人之れをよけんとするさま、まことにお気の毒であった。

夜、同校友会編輯会あれど行かず。家にて文化史を考へる。史蹟のこと整理。

はがき、市役所、府庁、知恩院の祝賀会及法会に出席のこと出す。肥後氏に陳列につきての依頼。山根氏より電話。古義堂のこと依頼。

十一月十日 土曜

午前、山田賀一氏と共に内匠寮出張所に拝賀に行く。天皇陛下、皇后陛下への拝賀の署名をする。

午後三時運動場にて拝賀式あり。^{〔新吉〕}今村教授、^{〔従カ〕}総長代理。

十一月十一日 日曜

奉祝展覧会の準備のため午後九時頃まで^{〔従カ〕}□事する。

十一月十二日 月曜

大学の奉祝展覧会、第一日。

十一月十三日 火曜

大学、奉祝展覧、第二日。

けふ、崇福寺及滋賀宮跡見学。雨ふる。十分見学出来ず。

十一月十四日 水曜

大嘗祭の日。朝より雨模様となり、霧靄の如きものかゝる。

十一月十六日 金曜

地方饗宴。

十一月二十五日 日曜

山中商会の支那陶器見物。羽田、^{〔謙次〕}清野。正午、浜田。上野氏の御馳走。

十一月二十八日 水曜

教授会。

十一月二十九日 木曜

^{〔康算〕}深田博士告別式。文学部に於てハ本日休業、弔意を表するため。

十二月一日 土曜

読史会大会。大阪女専行休む。

原稿かく。川端道喜の粽についてのこと。

大会会衆百五十名ほど。陳列品は大典記念の陳列品のむし直しなり。

十二月四日 火曜

大蔵会展覧見物。龍大。

十二月六日 木曜

講義。

十二月七日 金曜

講義。

講義終了後、三浦先生より助教授選任のことにつき談合。

^{〔直勝〕}中村君のことにつきては意見協はざるところあり。先年の言辞に背くことを言ふ。甚だ非なり。特別に保護して勉強させることも結構なれど、余りに計画的にしてこれではまるで人為的作為の行動にて、世間を瞞着すると同前なり。内地留学の新例を開くこと、東京史料編纂にて勉強させることなどを言ふ。かゝる例を開くは余りに特別なことになからうか。予の反対に対して、これ学風の相違よりするなりと言ひ張れど、かゝることのみではないことを言ふて置きたり。遂に一教授として史学打合会に持出さんとすと主張されたり。予、之をとゞめたれど頑として主張をまげられざれば、遂にそのまゝとなりもの分れとなる。

十二月八日 土曜

午前六時出発、大阪女専に行く。二時間授業の後、引きかへして史学研究会大会に行く。魚澄氏、今井貞臣氏同道、京都にて十二時半なり。なべ茶屋にて昼飯。夜、懇話会。

講演は、^{〔澄〕}平泉、^{〔喜一〕}鳥山、^{〔新藏〕}新城。

夜の談話は藤崎俊茂、岡崎文夫、内藤虎次郎、石田幹之助、若山善三郎、魚澄惣五郎、岩井武俊、能勢丑三。

十二月九日 日曜

竹生島に行く。池田、鈴木同伴。

十二月十二日 水曜

教授会あり。二時過すむ。

後、三浦教授と中村君のことにつき談合。妥協的な言辞を言はるれど、要するに一教授として提言することを主張さるゝ故、殆んど調和すへき余地なし。助教授にすることは三浦先生の意志に任せ、三浦教授在任中教授にすること問題起るとも、先生は発言せず予に任すと言はるれど、在任中教授

問題はまづ起ることなかるべく、又何年後のことを今日約束（？）することも甚だ正当ならざることなり。議協はず。

史林の編纂会。出席、予、委員数人。

夜十時七分の汽車にて東京に向ふ。岡崎文夫と一所なり。岡崎遅れて来る。大津駅にて予下車待合ハす。十一時五分の列車にて岡崎来り、一所に行く。

十二月十三日 木曜

東京、唐宋元明の絵画の展覧を見に行く。上野の東京府美術館なり。

けふは東京市の大典奉祝の会を上野にて開く日なり。省線にて恰も鹵簿還御のところを拝観す。上野駅について見れば驚くべき人数にて、交通遮断をせるところとて上野に上るを得ず。十二時過より漸く上り、展観を見る。閻立本の歴代帝王図巻は見事なるものなり。支那画のよいものを見、大に得るところあり。日本伝来の支那画〔が〕か可成立派なるものか来てゐることを知るのである。

汽車、午後七時二十五分のものにて京都に向ふ。

十二月十四日 金曜

七時頃家にかへる。沐浴。午前中講義休み、午後、史研講義出る。

汽車中よく眠りたるやうなれど、夜に入りて疲れたり。明日は又早朝より出る日なり。

十二月十五日 土曜

十二月十五日発信、安倍京城法文学部長の書信。〔能成〕試験問題提出されたきこと。試験は二月十四日より三月九日迄にて、成績はとりまとめ三月十五日限りにすること。このことにつき二十三日返事出す。

国史問題

史学の発達より見たる国史研究の現状

平安朝〔期々〕の自然観

平安期〔初々〕の学問と文化

古代の精神生活

女専、朝六時起床、行く。八時半よりの授業。

午後一時より天守閣造営に関する協議会あり。大阪市公会堂楼上にてする。〔一〕関市長、〔五一〕武田、〔俊一〕天沼、〔静夫〕波江〔大阪府土木部建築課長〕、〔専太郎〕沢村、〔貫一〕今井〔大阪府立図書館長〕、〔惣五郎〕魚澄、〔左五郎〕堀居〔大阪府立市民博物館長〕等の諸氏。天守閣造営については黒田家屏風の函についての疑問出て論議する。

十二月十六日 日曜

午前六時十五分前出発。六時過の汽車にて、二条駅より丹後に行く。佐藤、鈴木。丹後与謝郡山田村小学校裏の遺跡。永仁の板碑。成相寺。宿泊、大雪となる。

十二月十七日 月曜

成相を出で大雪をおかして調査。

一宮に至る。発掘品を見る。寒気甚し。汽車にてかへる。終列車にて十二時かへる。

中村直勝君、留守中来る。菓子折持参。朝鮮の旅行の礼なりとのこと。

十二月十八日 火曜

午後龍大。特殊講義。学生二、三人。三時以後、講義休みて大学に行く。

けふは助教授任命につきての史学科の打合会なり。中村氏の問題出で議論あり。次回に考ふることとなる。

十二月二十二日 土曜

女子専門。午前八時出発。

けふは同僚会の忘年会を枚方温泉にて開く。二時よりなりしも五時晚餐にて、五時には府庁の大典の後の慰労会あるを以て辞して京都に向ふ。四条大橋にて吉沢博士〔義則〕と同車する。中村楼にて開く会には、〔恒吉〕稲垣、〔嘉平〕土岐市長、〔光哲〕浜岡、〔文蔵〕後川、博物館長〔不二男〕和田氏等あり。久龍の舞等あり。

十二月二十三日 日曜

始めて予定の日程なき日曜なり。家居する。読書する。午後少睡。疲労を医せんため也。博覧会〔大札記念京都大博覧会〕を見に行かんとしたれとも遂にやめたり。

十二月二十四日 月曜

朝起きて鈴木氏に電話。市役所に行き西院村の礎石を掘りに行く。天気よろしかりしに、十一時半頃より小雨あり、つめたき雨ふり出ず。毎日新聞の松井氏見に来る。都市計画課長木村喬氏同道、本田氏現場にあり。

三時頃かへる。東京帝国大学史学科学生の京都大学来訪あり。^{〔勝美〕}黒板博士引率なり。貴賓室に於て茶話会あり。此度は時間少きを以て感想談の言ひ出しもなく早く仕舞ふ。黒板博士と同車、高台寺南の丹栄に行く。京都府庁の史蹟調査員の忘年会なり。史蹟のことにつき打合せあり。叡山の明治記念標のこと防止につき、又堀川塾の保存のことなど談ず。十一時帰。^{〔同〕}松村〔京都府学務部社寺課長〕、^{〔綱藏〕}藤田〔同社寺課属〕、^{〔久七〕}山本〔同前〕、^{〔虎雄〕}佐藤〔臨時調査委員〕、三木茂〔同前・理学士〕氏等。

十二月二十五日 火曜

昨日掘り出したる礎石の記事、毎日新聞京都附録にあり。

正午頃、小橋浅雄氏来。和泉式部の人生観の論文修正のことを言ふ。副手の藤直幹氏来る。来年度堺市史の囑托として三浦先生の下原稿をつくること、及び簡易なる年表を作製することを書物屋より三浦先生に依頼したるか、これを藤氏にすべきやう言はれたることにつき相談あり。年表の如きは売れ行きよしとてつまらぬものなれば、なるべくせぬやうにすべしと注意する。午後三時半より京都の博覧会の最終日故、見に行く。八時かへる。肥後氏来る。学士院研究資金補助のこと発送したりと言ふ。

十二月二十六日 水曜

朝、史林の雑録等の原稿を校閲す。割合時間かゝり、午後少し過までかゝる。池田源太氏来る。少し待ちて貰ひて原稿見る。池田氏帰の後、夜、仕事する。少しく進むやうになる。夜、中原与茂九郎氏来る。遅くまで話してかへる。留学すること発表になる由なり。

十二月二十七日 木曜

朝十時、池田氏と共に近畿協会の相談会。木屋町西村屋に行く。陸軍大佐竹本多吉に会ふ。大に近畿協会の事業につき論ず。池田、^{〔聖太郎〕}小国、^{〔彦太郎〕}西、阿由葉氏あり。

渡辺俊雄氏の借用品たる絵画類を返却する。国史研究室の中田氏にこの件依頼す。

夕方、研究室に入る。夜、水野清一氏〔東洋史28卒〕来る。民俗談話会の話。支那に行きて一年間勉強する話。

十二月二十八日 金曜

^{〔勝雄〕}船津〔国史29卒〕、小島二氏来る。船津氏ハ東北学院のことにつき日野真澄氏に会ひたること、小島氏は新聞のことにつき清水坂伊藤善五郎氏に紹介かく。

十二時研究室に行く。室片附ける。二時帰宅、龍大の渡辺氏のため、康富記五、師茂記五、師郷記五、借す。前夜出し置きたり。

島田大尉夫妻来る。

加藤竹男博士来る。小談話、辞去。

夜、大丸に買物に行く。ゴムまり買ふ。めいせん。加藤氏令嬢の為め也。

十二月二十九日 土曜

昼、龍大学生三木一夫、渡辺二氏来る。論文のこと相談。

夜勉強。意地悪き寒さにて仕事捗らず。几辺整理する。

露店見に行く。出町橋年の暮のけしきなり。松をかふ。^{〔やぶこらじ〕} 藪柑子の色美しきを買ふ。しめっぽき空なり。

十二月三十日 日曜

朝早く起く。気分少しよし。頃日来疲労あるため仕事意に任せず。頭脳の集中を弱くするのを感じたり。昼、しめをかざる。夕方、岸本氏来る。散歩する。橋まで行く。帰宅後、床に入りて読書。

十二月三十一日 月曜

午前八時頃、床中にて読書、原稿をかく。これより少しく午前の仕事をせんとす。已に久しくこれを廃した。九月朝鮮に行くときより以後、朝は早く起きれども、読書執筆しかたし。已にやゝその習慣を失ひたるやうなり。沈思するにはこの早朝の良時をよく利用すべきなり。

補遺



月	／	／○
火	／ 普、龍大／	
水	／ 演特	／
木	演 (特)／	／ [] 普演
金	普、普、龍大／ 普	／ [] 普龍大
土	専	／ 専
日		



月	龍大／	月
火	／	火
水	／	水
木	演 (特)／	木 史演 (特)
金	普、普	／ 金 普 龍
土	女	／ 土 専
日		

〔欄外メモー省略〕

住吉阿部野町八七 岡本正蔵
御幸町三条上ル 林良材

当用日記 昭和四年 博文館発行

三月六日 水曜

【発信 伊藤氏手紙】

【受信 学士院手紙】

三月七日 木曜

朝、女専成績送る。

伊藤八郎氏〔国史27卒〕来。夜、池田源太氏来る。

三月八日 金曜

【写真撮影】

朝、大学。論文持参。本部水谷氏に成人講座の廿五日のこと延期のこと依頼。

食堂、^{〔真澄カ〕} 近重、榊氏談話。

一時半裁判所に行き、紙質鑑定と呼出状につき面会。

判事は丁度法廷にあり。暫時待つ。二時半帰学。^{〔茂〕} 小松教授〔理学部〕に紙のこと聞く。

島文次郎氏宅の近くに石の出でしを見に行く。銀閣寺管長に会ふ。西指菴遺蹟見る。夜かへる。論文見る。夕食後、蜷川〔敏・京都市土木局地理課技手カ〕氏来る。

【西指菴】

三月九日 土曜

【○大学より小使来た

○硝子や松尾氏のところに行き、岩倉行のこと相談。夜返事あり。都合により延期とす。

梅園氏来】

朝、裁判所の鑑定をかきつけんとする。時に^{〔正〕} 橋川君来る。地理の講師として大谷大学に^{〔繁樹カ〕} 村松氏行くことの代りに宮川善造君〔地理29卒〕行くことにせんと依頼したが、学長より本年の卒業生を学部^{〔正〕} の講師にせんこと、他との折衝あるを以て都合悪し

とのことにて談話成立せず。小生の古代史のこと
第二学期よりならば開講せんとし置く。橋川君
帰る後、龍谷大学々生二人来る。降誕会の時の筆
蹟揮毫依頼して行く。帰るの後、裁判所の鑑定かく。
三時四十分より大学に行き論文松村栄一氏〔哲学
29卒〕のもの渡す。夜散歩後、池田君来る。十一
時まで近畿協会のこと。其後一時まで論文、宮崎
円遵〔龍大文学部史学科29卒〕のを読む。

三月十日 日曜

けふは民俗談話会の予ての計画によって、野外研
究として八瀬に行き採訪をすることとなり、きの
ふ水野清一君の話によって、今朝九時出町柳駅を
出てマ八瀬に行った。八瀬大橋一丁手前の石川市
次郎氏宅に少憩して後、八瀬の釜風呂を見る。釜
風呂は川の東にあって僅かに保存せられてゐる。
村役場にて河北氏〔谷北兼三郎〕について八瀬の旧
俗の談話をきいた。談話別記にある。行くもの、
水野、池田、森鹿三〔東洋史29卒〕、三宅〔京都府立
医科大学30卒〕、吉田三郎〔国史31卒〕、有光〔考古31卒〕、
外一人。六時かへる。

宇佐美氏（大阪朝日新聞社）開国文化講演のこと
電話にて依頼。廿日とすることに引うく。明朝返事。
五代仁義氏来、不在。

三月十一日 月曜

【1朝日返事。2立川氏手紙。3谷井、木島、観月。
2手紙。4同文館ノコト原稿。5論文、龍大。
6史研、龍大。7大学三年成績】

朝沐浴。龍大の論文、北島ノ日本上代音楽ヲ読ム。
龍大の史学概説、国史特殊講義採点おくる。

龍大より使来る。午後三時半又千代を龍大に遣はす。
四時大学に行き、三須〔桂樹〕の論文まはす。採点をし、
午後九時までのこる。

来学年よりは採点のこと今少し早くきまりつけた
し。

三月十二日 火曜

【東氏手紙出す、岩国。朝日。禿氏十三日】

三月十三日 水曜

【教授会】

三月十四日 木曜

【口頭試問。八時ヨリ】

五月十日 金曜

講義。大橋氏来る。

五月十一日 土曜

女子専門。

立川氏家たづぬる。

十一時和歌山市に行く。自動車内にて木島氏に逢ふ。
車中にて酔人の為め嘔吐をかけられる。むさきこ
と夥し。

五月十二日 日曜

和歌山。

五月十三日 月曜

夕、和歌山よりかへる。

五月十四日 火曜

研究室に行く。浜本浩氏〔改造社京都支局長〕来る。
自然科学ノ原稿〔西田〔郷土史研究と其の教育〕『自然科
学』4-1改造社1929.9〕催促。夜、池田氏来る。藪田氏、
文林堂を初めるとて来る。

五月十五日 水曜

教授会、会食。けふは賀茂祭。学友会ノ会合ある
日なりしも延期となる。

五月十六日 木曜

午後演習。

龍大、学長排斥運動あり。十日間休校。龍大に行かず。

夕方榊先生来る。食事。

五月十七日 金曜

講義午前、午後。

夕、金曜会。午後十一時過散会。

五月十八日 土曜

桑飼村温江に行く。

五月十九日 日曜

原稿かく。考十分まとまらず。

五月二十一日 火曜

原稿。

五月二十二日 水曜

原稿かく。三時研究室に行く。

立川氏より使。仏画五軸渡す。

五月二十三日 木曜

原稿かく。

五月二十四日 金曜

【来訪。牧野信之助君。佐藤虎雄。改造社電話】

夕食後、久し振にて散歩。書物店にて通釈注文する。

五月二十五日 土曜

けふは京都史蹟調査会の宇治を名勝にすることにつきての相談会ある日なりしか、都合により延期となる。改造社の原稿をかゝんとす。

午前梅原君来る。十一時より原稿、十二時食事。

午後松浦嘉三郎君〔東方文化学院京都研究所所員〕、小川茂樹君〔東洋史28卒〕来。五時半まで談す。夕食後少し原稿かく。木島君来る。十時半まで居たり。原稿其以後捗らず、十一時半電灯消える。仕方な

く寝る。

五月二十六日 日曜

【日記】

九月一日 日曜

【花ノ寺へ通知ノコト】

九月四日 水曜

【花の寺ノ仏像調査】

花の寺。

十一月一日 金曜

【1. I can't a joint to the insists of prof. Z on the reason 1. If a prof can】

学生ダイアリー 昭和九年

一月一日 月

朝、早起。

大西定彦君〔大西祝長男、道の実弟〕来、七時。静子〔定彦妻〕、礼子〔同長女〕。越年。

大学拝賀。

大阪、年賀。

一月二日 火

大阪、岡本正蔵、仁三郎来。

夕刻、来。日記買ふ。

一月四日 木

【朝、散。午後、序一。夜、年賀状】

一月五日 金

【シュミット来】

一月六日 土

赤松五百磨君葬儀。了蓮寺。喜田、石田憲次、末

川博君会葬。

研究室に行く。年号大観〔森本角蔵『日本年号大観』目黒書店1933〕とりてくる。

序文、佐藤君送る。

一月七日 日

朝、七草の粥なり。湯に行かんとしたるに梅原末治君来訪。一日に生れた長男の命名についての話あり。郁カホルの名よろしかるべしとのこと。

佐藤虎雄君来。春日社祭略もち来らる。那智の田楽調査のため那智社神官への依頼のこと頼む。

柴田実君、昇給のことあいさつ。研究室整理のこと。武居権内君〔国史33卒、34.3～日本図書館協会勤務〕来。

文学部図書係のこと依頼ママさる。

午後、年賀状注文、大丸まで行く。

夜、西堀、山根二君来。西川一草亭新年会ノこと。

赤松俊秀君〔国史31卒〕来。前田君一良〔国史32卒〕赴任のこと伝言。十一時過臥。初めて早くいねたり。

一月八日 月

赤松智城君、弟、妹、同伴来訪。

夜、森下真男〔京都府立第一中学校教諭〕、池田両君来。赤松俊秀君来。

一月九日 火

午後、研究室。小島祐馬氏会フ。浜中寛淳君ママ搦接。

京大倶楽部のことにて伊津野、吉田孫一君〔文学部書記〕会。

四時半、赤松氏を訪問。

夜、懐徳堂宴会つるや。

一月十日 水

午後、研究室。

赤松智城君、研究室来。

史学ノ書読む。〔Kurt Breysig〕 〔Oswald Spengler〕 プライシツヒ、スペングラー等。

夜、京大クラブ宴会。

協議事項

客員推薦、出張、幹事補欠。

羽溪君ともにかへる。

新聞出る。〔俊夫〕野上教授よりの懸賞論文のこと出でず。

次には載せたし。

一月十一日 木

史学史原稿。

一月十二日 金

朝さむし。雪ふりおり。

朝より電話多し。山本正信君〔国史33卒〕、伊藤幸次郎君、入山雄一君〔学友会新聞部世話人〕。みな研究室にて会ふこととす。

十一時出でんとするとき、市役所区劃整理ノ係来。

十二時まで話し。大急ぎ研究室に行く。

〔京都高等蚕糸学校〕 京都高蚕教授中島萬朶氏来。講演ノコト依頼。他日ニスルコトトス。

大急ぎ自動車、新京坂〔阪〕、自動車にて大阪天臨閣に行く。相談会。特別陳列の相談。能衣裳展見る。

大阪家に入る。年賀状かく。女専講義調。朝より用事重複、時間とてもなし。これでは身体もつゞかぬやう覚ゆ。

一月十三日 土

大阪。朝、女子専門、初めての講義。十年役後、日本地位。国際関係。西南戦役後民権。次ハ朝鮮事件。試験問題。

黒潮列車出るにつき乗りて白浜に行く。二時三十分天王寺坂〔阪〕和出発。五時半白浜口。バスにて湯崎まで。栖原屋に始めて泊る。前回湯崎に行きたるとき見ておいた。当時新立なりしも、今行って見ればよい宿にてもなし。白浜ハ余りに多く人込む。とても静かな宿得かたしと思ひ湯崎に行きたり。

夜寒し。浪荒くして、道歩めは冷え上る。外出も出来ず蟄居して、教科、年賀かく。

一月十四日 日

湯崎栖原屋出発、風強し。

白浜にて宿を探したれど、浦島温泉より山の方を歩る^{〔ママ〕}き、建築展など見るうち三時近くなる。黒潮列車の白浜口出発三時四十分に聯絡するバス出ると云ふにより、急に帰ることとし、これにのり込む。六時四十分大阪天王寺着。一旦家に入り、高島屋まで行き電灯用具などかひて家にかへり、夜執筆。遅くなる。一時半過ぎたるべし。

一月十五日 月

大阪にて。午前十時。教科。午後、年賀状認ム。夕、関西信託員来。菅原利子ノコト。夜八時帰宅。

一月十六日 火

【雪降る】

演習日なれど繰のべしたり。

教科、調査。午後二時杉山末氏来。奥村留次郎氏女命名ノコト。

三時研究室。

平田正夫氏、稲荷社ノコト質問。

田畑盤^{〔整〕}門氏、弘法大師講演ノコト依頼。

井川定慶氏、百科辞典依頼ノコト。山本正信氏ノコト頼ミ置ク。

時の谷勝^{〔野〕}氏〔国史33卒〕、講義ノート。島田博^{〔篤野〕}氏〔33入・哲学科36卒〕新聞部入部ノコト。

日出新聞社、大伴氏神社、龍安寺住吉社ノ事問合セアリ。

夜、池田氏電話、教科打合延期。

赤松俊秀君、史蹟委員会、天橋ノコト。御土居破壊実況ノコト。

一月十七日 水

【教授会】

大谷大学。演習ハ一人のみ来てゐた。

午後、教授会。新講師決定。

夜、特殊講義準備。

一月十八日 木

朝、特講義。午後、特講義訂正する。普講義準備、遅くなる。

一月十九日 金

【一草亭宴会】

普通講義。参考書のこと。補助学科のこと。

演習、第一回なり。十六日すべきを延期したのである。

貴賓室、三時半まで。陳列館協議会。

夜、一草亭の会、瓢亭にて。新村、浜田、武居巧〔大阪朝日新聞〕、高原慶三〔大阪毎日新聞〕、山根、西堀、同席。

十一時帰宅。歴史ノ会のこと。山根、西堀君に言ふ。

一月二十日 土

午前、車折社高田^{〔勝次〕}氏来。

午後、福尾氏来。

中外、鮎沢氏来。大伴トアル瓦発見のことなり。東福寺の旧境内、赤十字社病院のたつところより出づ。

夜、散歩。寒風つよし。

一月二十一日 日

朝、地理大系九州篇〔『日本地理大系九州篇』改造社1930〕読む。

午後ストーブ入る。読書。

夜、金丸氏来。

武藤誠氏来。

園正造氏〔理学部教授〕紹介にて丹弘社の人来る。

金山村〔現・福知山市〕の人同伴、弘法大師の不動見てほしとのこと。判画なり。

夜、教科。二時半臥床。

一月二十二日 月

【新聞部編纂会、延期してもらふ】

朝、伊東^{〔伊東延吉学生部長〕}学生課長へ手紙かく。

午後、大阪城、臨時委員会。建武中興六百年の記念展覧会を開くや否やのこと。次の月曜日決することとす。夜、教科かく。十二時臥。

一月二十三日 火

朝、演習。

昼一時より龍安寺に行く。高田氏の住吉神社^[か]が大伴氏の伴氏神社なるやを取調べるためである。

住吉社は永禄七年の頃まで遡り得る。寛文九年の山境図には仁和寺の境内に入る。中井主水の裁決する山境相論の図には、仁和寺と竜安寺の堺を決したものである。この争は寛文七年より起れり。永禄のものは竜安寺が地面を買ひたる時のものである。竜安寺と云ふよりは塔頭^{セイゲン}の西源院の買得山林ノ注文によるのである。

龍安寺には伯蒲和尚のとき秀吉来りて庭前にてうたを読む、この短冊あり。秀吉と署名してゐるのを見る。赤松君ノートとる。

五時より新聞編纂会。夜、手紙かく。川田、住友。

一月二十四日 水

谷大。

一月二十五日 木

特殊講義。

訪問者二人。午後四時、徳重君^[浅吉]〔国史25卒〕来宅。

一月二十六日 金

講義。

研究室。

夜、阿部氏宅、壬戌住宅組合総会。十時帰。

一月二十七日 土

朝、女専講義。

午後三時、南海にて和歌山に向フ。原^[随園]、吉田孫一氏落合ヒテ行ク。花田^[大五郎]和歌山高商校長同車。同氏令嬢、女専生なり、同車。不老館にて京大倶楽部

の和歌山地方部の協議会、及発会式。

十時過。新和歌浦、望海楼とまる。

一月二十八日 日

朝、望海楼出発。一時頃大阪宅。六時まで読書。

六時出発、帰京。

一月二十九日 月

前、龍大。

午後、大阪天守閣打合会。

夜、千日前マデ行ク。「街ノ灯」見物。サホド名画にてもなし。

一月三十日 火

演習。午後早ク帰ル。梅原君宅御祝ニ行く。夕、梅原君来。

一月三十一日 水

朝、谷大。午後、史学科打合会。来学年講義ノ決定。三時前済ム。

来客多シ。高田（車折神社）氏等。六時マデ。ヒキツマキ来客。帰宅七時頃。

二月一日 木

朝、在宅。講義（特）ナシ。

桑嶋敬直氏来。区劃整理ノコトニツキテ也。午後、山本正信氏来。平凡社ノ就職ノ件。

夜、講下調。

二月二日 金

朝、普通講義。上代政治。

午後、昼飯、大学。一時半仁和寺に行く。大伴神社調査ノ為メ也。

六時半、読史会予餞会。鶴清。十一時帰。

二月三日 土 朝雨、午後晴 夜、京都ハ雪

朝、十時出発。神戸長田神社ノ追儺式見学。活動

写真トル。十一時半帰宅。

二月四日 日 曇

朝、教かく。午後、同。

富森君、立命大予科ノこと。

出雲路通次郎、講師のことにつき来訪。

夜、教。

二月五日 月 晴但くもり 寒さ少しゆるむ

【不在中来客。鈴木祥造〔国史32卒〕、田中文次郎、池田源太。電話、三浦闊】

朝、竜大。

午後一時、佛光寺に行き宝物を見る。

元応二年の聖徳太子像の胎内の文書。一は造立の願主、一ハ了海上人ノ遺骨を収めたるを記せる包紙、共によきものなり。

了源筆と云ふ破邪顕正抄、これハ足利中期頃ノ写。

教行信証、足利のもの。愚禿抄、足利のもの。

善行上人絵伝二卷、見事のものにて、詞書は後醍醐天皇と云ひ伝^{〔が〕}ふるか、上代様にて伏見院の御流の如き見事なる筆勢なり。

了海筆の聖教類。

夜、新聞部編輯会。後、新聞部送別会。鮎鶴。

十一時帰。

二月六日 火

演習。

十二時、来訪者多し。三浦闊。齒長寺住持。

宅、吉田三郎君父、真一氏来。

四時半。学友会予餞会。川田氏手紙かき、伊藤氏に与へる。

宅には夜、森下氏、池田氏。

二月七日 水

谷大講、終ル。演習あり。最終。

二月八日 木

けふは講義なし。勉強。教科書ノコトかく。夜までかく。けふは谷大の予餞会、欠席。

二月九日 金

講義。

十二時ヨリ来客多シ。二時かへる。宅には出雲路氏来訪。

亀岡成人講座、綱目渡す。

国史研究室、打合せ会。六時スミ。途中夕食をとり大阪にかへる。

読書。大阪の歴史を語る、につきての準備。

二月十日 土

女専、散^{〔散髪〕}はつ、試験。

十日会講演。美の津ビルヂング七階。大阪にて泊る。

二月十一日 日

大阪にて。糸図調べる。島原乱ノ時ノ人ノ家ノモノ也。成人講座ノ講演ノ準備。八時発かへル。京都。

二月十二日 月 雪 大阪温カシ

龍大講義。十二時過マデ。コレニテ終ル。

一時快速度汽車にて大阪、食事。市役所土木部長室、協議。四時ノ新京坂^{〔阪〕}ニテ四条着。四時五十九分二条発。

亀岡小学校、成人講座。

国史ヨリ見たる日本精神 三時間。

開講式、講演二時間、聴衆二百二十名。

十時半カヘル。田中勝雄君〔国史32卒・亀岡高等女学校教諭〕見送り下サル。

二月十三日 火

演習。

十二時来訪者。

一、大毎映画教育の記者、原稿依頼。

二、豊岡ノ人。招魂碑ト忠霊塔ニツキ、イヅレノ

名ガヨロシキヤノコト調査依頼。
三、牧野信^(之)ノ助君。北海道帝大教授上原氏^(轡三郎)入洛。
昼餐ヲ共ニスルコト。
二時半教授会。
停年制、学年末ヲ以テ停年トスルコト。
満蒙研究会ノコト。
和辻教授東大転任ノコト。
師範大学改正案懇談会ノコト。中座シタリ。
四時五十九分二条発、亀岡小学校ニテ講座。十時半カヘル。

二月十四日 水

谷大試験。
十時—十二時。京大、演習補講。最終也。
十二時来訪。
吉田三郎君 住友寄附決定ノコト。
高田勝次 大伴神社。
赤松俊秀 全神像ノコト。神后皇后縁起御受納ノコト。
柴田君 黒板博士へ、伏見院宸翰、鹵長寺縁起見セルコト。いづれもよく国宝的価値ありと云ふこと。
高石綱君〔31入・史学科〕葬儀。瀧山与氏親戚也。
野上教授より電話。師範大学案協議会。
夜散歩、寺町マデ行ク。

二月十五日 木

多忙にして寧日なし。大阪。
毎日—用事ありて寸刻の閑なし。以後日記記せず(追記)。
大阪。

二月十六日 金

大阪。

二月二十一日 水

新聞部。

二月二十二日 木

徳島に行く。

二月二十四日 土

徳島講演。

三月十九日 月

東京。国民精神文化研究所、初めて行く。

三月二十日 火

同所卒業式。斎藤^(実)首相臨席。

三月二十一日 水

朝、東京駅、乗車券。上野駅、帝室博物館、弘法大師展。強風にて歩むことを得ず。日本橋高島ヤ。
わか^(か)日本皇国史展覧。一時、富士にて京都。

三月二十二日 木

朝十時、史学科入学試験協議会。五十三名入学。

午後、佛光寺に行く。

佛光寺 聖徳太子像、建保在銘阿ミタ像、大行院 快慶作アミタ像、見る。

浜田博士、向井芳彦〔国史31卒〕。

夜、向井氏紹介状とりに来る。

三月二十三日 金

朝、高田氏来訪。

午後、森下、池田君来。

夜、赤松俊秀氏来訪。大伴神社考証成稿。

三月二十四日 土

京都府史蹟調査の委員会。九時四分京都発。

笠置山にて行ふ。笠置温泉にて昼食。四時発帰途。

向井芳彦氏電話。吉田三郎氏電話。

田中樞一氏来訪。

三月二十五日 日

朝、台湾大学〔台北帝国大学〕中村喜代三君より手紙来る。西洋史教授につきての相談なり。かねて菅原憲君推薦しありたれば、これにつきて意見及び勧誘を求むことなり。

午後、旅行につき調査。

試験答案、大学入学者検定のもの三通見る。岩波喜代登〔栃木県女子師範学校校長〕、林稲苗〔徳島県立高等女学校教諭〕氏に手紙。

東伏見伯邸より電話。小島真氏〔国史29卒〕より電話。加藤一雄氏来訪。

三月三十日 金

卒業式、午前十一時。

午後、嵐山にて茶の会開催。

卒業生

〔邦英〕のち慈治

東伏見、星島

〔喬〕〔隆利〕〔英治〕〔文三〕〔景雄〕〔茂〕
青山、岩城、岩瀬、桜井文、桜井景、橘、

〔樺三郎〕〔辰三〕〔文雄〕〔真澄〕〔清〕
高井、多田、多賀、茂川、山本

西田、柴田

欠席 〔城島正祥〕〔武〕〔一郎〕〔貞吉郎〕〔安一〕
野中、渡部、本谷、藤田、真利

三月三十一日 土

教授会

四月二日 月

西川一草亭、柳山玄成家結婚式、。

四月三日 火

夜、吉田三郎君結婚披露式、京都ホテル。

四月四日 水

夜、手紙、国民精神、偕行社。

四月五日 木

ブライジツヒ読ム。

小島真。

森下、池田源太君、研究室。

新聞部会、入山、^{〔野〕}時の谷。

総長還暦祝賀会、本部楼上。

四月六日 金

【歴史的社会と歴史に於ける精神力。歴史精神。

歴史と民族精神】

大工、宮本。菅原氏。金丸二郎氏〔国史31卒〕。出雲寺。^{〔路〕}野村芳次郎。畑谷。赤松俊氏。都留氏。研究室、柴田、野村。

電話にて西川一草亭の会断る。

東京より電報。熊木氏より高井氏ノコト。

四月七日 土

奈良にて田楽のこと調査。春日神社にて伊藤磯十郎氏の田楽神事を活動写真にとる。

四月八日 日

朝九時三十八分京都発電車にて奈良に行く。古文化研究所発会式。奈良ホテルにて。

研究題

藤原京の研究

七大寺遺址研究

南朝遺跡研究

〔宗宣〕
斎藤知事、和田英作氏其他。

京都にかへりて服をかへて、大阪天保山より紀州勝浦に行く。

四月九日 月

朝十時着の予定の船は十二時になりて漸く着く。温泉浦島に泊ることとし、二時の乗合にて那智に発つ。神社の文書調査。

四月十日 火

朝八時二十分発汽車にて新宮に向ひ、神社の文書及個人のものにして武田信玄関係のもの調査。

プロペラ船にて本宮着、四時前。本宮社務所に七

時過まで居る。

湯の峰温泉あつまやに泊る。

四月十一日 水

湯の峰朝立ち本宮に行く。

十二時、本宮立ちて朝来まで自動車、三時四十分着。
朝来より白浜口。白浜口より椿温泉。椿温泉より
ハ富田。富田より白浜口にかへり、白浜の白良荘
にとまる。

四月十二日 木

白浜を発して田辺に至り、佐山伝左衛門氏訪問し
て文書及仏像を見る。一時四十分発、大阪に五時
十五分前着。

弘法大師展覧会に朝日会館に行き、大江計画部長
に会ひて時間外に展観見る。

三宮にて食事。京都十一時帰宅。

四月十三日 金

教授会、午前十時。第二次入学試験結果其他。
大阪天守閣会合。四天王寺展ノコト協議。京都か
へる。

四月十四日 土

正八時出発、大阪女専行く。大阪宅よる。大丸、
中食。大丸にて書物買ふ。京都かへる。

四月十五日 日

朝、清原夫人、宣雄君〔34入・国史38卒〕伴ひ来訪。
数日前より京都来。

熱田神宮発行美以都編纂、林氏来。

池田、森下氏来訪。

馬渡重明氏来、序文ノこと。

東伏見家使、白酒到来。

赤松俊秀君来、宿のこと。

高井悌三郎氏、玄関にて会ふ。

四月十六日 月

朝、龍大に時間割のことにつきて行く。後、谷大
に行く。同様の用事。二時かへる。昼食。

百万遍法主林彦明師来、法然水のこと。

山野運一氏来。

森下真男。

出雲寺氏来。

地図製作の野村芳次郎氏来、午前也。

京都府教育会、国史講座ノ開講。午後六時半。藤、
武藤、中村。

帰宅八時。田中達男氏〔国史31卒〕来、茨城師範ノ
コト。吉田三郎氏来、国民精神文化研究所辞令、
今朝発令して打合ノ為也。

小西博士より電話。高井氏へ葉書かく。

四月十七日 火

龍大、開講断り電話。

沐浴。

夜、源豊宗君。

十二時黒谷本山炎上、火焰天に沖して、つりかね
の早打ものすごくひゞき来りて

四月十八日 水

谷大に行く。学生来らず。十時半帰宅。林彦明師
の手紙探かす。出て来りてこれにつきて法然井のこ
と調査。

午後、大学研究室。溝上氏。池田君。朱舜水碑文
売りに来る者。野村芳太郎使、丸太町御町通上ル、
謄写版業、山口仏教会館附近。向井芳彦。大平君。
柴田君。

自宅、清原君。

四月十九日 木

土木部区劃整理。岡本正蔵。中村直勝氏夫人。教室、
池田君。

副手打合会。三時よりの筈ノトコロ、自宅来客ア
リ三時半出校。国史学大会ノコト。学年講義始掲

示ノコト。

夜、池田君、森下君、野村君、出雲寺^[路]君、千種掃雲君、清原宣雄君。

神戸武藤君、梅原君、電話井川定慶君。

四月二十日 金

朝、法然井ノコト。午後、大阪。大阪城天守閣、建武六百年展覧、最終日。大阪天然寺。十時発、十一時宅着。

河内勘二君、電車にて会ふ。

一時三十四分つばめ。吉田三郎君、森下君、松山の不二君、精神文化研究所へ出発。

四月二十一日 土

廿一日ハ精研ノ入所式アル日ナリ。吉田三郎出所ノコト也。

朝、法然井ノコト調査。

京都府庁、大伴神社、古文化研究所、法然井ノ用件。一時三十七分京都駅へ。奈良に向フ。肖像画展覧会、最終日ナリ。奈良博物館。館長、春山、亀田。三時十五分前ニ着。三時三十分辞去。三時四十三分発車。四時二十六分京都。四時五十分大学。新聞部相談会。六時三十五分了。帰宅、七時来客。

富森大梁、徳重浅吉君。

四月二十二日 日

日曜日とて少し落付きて文章かきたく思ふ。然るに訪問者の多き日なりき。

- 1、梅原君。
- 2、馬渡重明氏。
- 3、春陽堂。
- 4、植木の山本氏。
- 5、区劃整理の工事につきての相談。
- 6、出雲寺^[路]氏。
- 7、向坂政平氏。
- 8、矢野薫、商船卒業。
- 9、祢津正志^[根]〔国史32卒〕召集についてノ挨拶。

手紙、木村武夫〔国史33卒〕、祝物到着。

四月二十八日 土

【女子専門】

四月二十九日 日

【訪問者多シ】

五月三日 木

【奈良女高師講演】

五月四日 金

【金曜、研究室相談会。知恩院山下僧正本葬、午後二時】

研究室相談会。

国史学大会の講演ノことにて忙かし。

夜、調査。

五月五日 土

【国史学会大会】

朝、講演ノ準備。午後、国史学会大会。夜、晚餐会。

此日京大クラブ、京大阪ノ発会式あり。

五月六日 日

【広島、京大クラブ】

朝八時ノ汽車にて広島に向ふ。

午後六時より広島、賑津^{ニギツ}〔饒津〕にて会合。

清原^[貞雄]〔国史10卒・広島文科大学教授〕、長田^[新]〔教育15卒・

同前〕、勝部^[謙造]〔哲学14卒・同前〕、竹中^[利一]〔英文20卒・同前〕、

中原^[与茂九郎]〔西洋史25卒・広島高等学校教授〕、加計^[敏吉]〔国史30卒〕、

浦^[廉一]〔東洋史28卒・広島高等師範学校教授〕、杉本^[直治郎]〔東洋史

23卒・広島文科大学助教授〕、其他。

十一時広島出発。

五月七日 月

【飯田小学校長両角喜重。梅原君、古文化研究所ノコト。栗^[野]の君来訪】

朝八時五十幾分、京都に着す。急きかへりて服を改めて、けふは久邇宮大妃殿下京都にお成りにて、総長の主催の筈狩りに御成りにつき、御招伴として参ることにて、大学にはせつけて大学より自動車にて長岡天神の池畔今尾氏別荘に行く。こゝハ故今尾景年画伯の別荘なり。つゝじ見頃にてよろし。山にて筈かりし後、池畔にて昼飯。三時かへり、五時半自宅かへる。
信州下伊那教育部。

五月八日 火

朝、特殊講義開始。午後、研究室、来訪者あり。佐々木佛光寺執事其他。
三時より龍大。六時帰宅。後、新聞部。

五月九日 水

朝、谷大。十二時まで。午後、教授会。夜、来訪者。

五月十日 木

朝、普通講義。午後、演習。
三時半、佛光寺ニ行ク。国宝調査員ト共ニ。
〔仲三郎〕 荻野、丸尾彰三郎、〔豊蔵〕 田中京城大教授。京大よりハ、東伏見伯、赤松、向井。
大学にて明日よりの旅行のこと打合せ。
宅ニカへり、池田、出雲寺、野村、赤松、柴田。

五月十一日 金

朝十時の汽車にのらんとす。遅れたるを以て大学に行き、停車場にて特急切符をかひて一旦家にかへる。
一時三十九分出発。午後十一時五十九分上諏訪着。宿ハ皆寝て居たり。駅にて成田屋ホテルを起してもらふ。午前一時頃就床。三時頃近所にて出火あり。

五月十二日 土

出火騒ぎにてめさめたり。四時半頃なり。また床につき

五月十四日 月

国民精神文化研究所。研究生に話しする。富士にてかへる。

五月十五日 火

かも祭り。特講休む。

五月十六日 水

【大工、塀工事】

谷大。

五月十七日 木

【退職教授送別会】

普。梅原氏原稿読む。演習。大、工事見ルタメかへル。

五月十八日 金

【大工】

家に居る。

五月二十日 日

吉野長谷行。

五月二十一日 月

朝、読書。

五月二十二日 火

特講。午後、龍大は昨日の降誕会ノ為メ休み。
柳田国男氏来室。けふより講義始まる。
けふ来訪者多し。

五月二十三日 水

朝、谷大。夜、池田、森下。

五月二十四日 木

普講。演習。柳田氏講義。夜、原稿、京都史蹟。

五月二十五日 金

朝、研究室に行く。柳田氏講義。

汐見氏電、賀茂系図、秀吉書状、謙信書状ノ持参者あり。忙しく、自己ノ仕事手につか^ずしてかへる。

五月二十六日 土

大阪女専。奈良古文化研究所へ手紙、廿五日。天然寺にて原稿つくる。十時半かへる。

五月二十七日 日

【甲子家庭会、天^(野)の山金剛寺行、予不行】

上岡〈 〉氏。中川忠三郎氏。汐見三郎氏電話。茅根一誠。梅原末治。

研究室、日曜なれど五時より六時半過まで居る。原田敏明氏へ電報、四日開講ノコト。

五月二十八日 月

小葉田淳氏へ手紙。黒板勝美氏へ国史講座ノコト。

五月二十九日 火

(講義)

後記

五月三十日 水

(谷大)

後記

五月三十一日 木

(演習)

(後記)

六月一日 金

七時三十分。京都発、片山津に向ふ。二時過温泉着。温泉に入り見物ハせず。

六月二日 土

金沢市見学。兼六公園、成巽閣、古九谷の研究、

野田山墓所、尾山神社。十一時三十分帰洛。沐浴。

六月三日 日

【黒板博士、京都来。京都にて古文化研究所ノ相談会】

午後三時半より東山、丹栄にて古文化研究所打合会。夜、丹栄にての会合。

六月四日 月

在宅。史蹟報告執筆。

六月五日 火

^(平八郎)東郷元帥国葬日。夜、柴田君来。

六月六日 水

午前、大谷大学。午後四時半、新聞部編輯会。

六月七日 水

朝、食後腸いたむ。十一時より普講。

午後、大阪女専にての那智田楽の演奏を撮影に行く。七時より白川泉園にて堂本印象氏と共に小学日本歴史参考図の相談会。

六月八日 金

朝、読書。午後、演習、補講、四時迄。研究室相談会、六時迄。夜、疲れありて仕事に倦怠。後にて観れば胃腸甚た悪しく、遅くより腸痛む。食事異常。

六月九日 土

女専に行く日なれど胃悪しく臥床、休む。

六月十日 日

昨日より胃腸悪くして臥床する。

大掃除。

午後、大阪、牧野安太郎、山野氏代理来。

五時半、東伏見伯家御招。羽田部長、浜田教授、

^[興詳]
岸書記官、予。

六月十一日 月
朝より臥床。

六月十二日 火
特講、休む。臥床。胃腸悪しく。
柴田、時の谷君^[野]来。大学開放ノコト。梅原君来。夜、
臥床。

六月十三日 水
朝、手紙。赤松君来。午後、教授会。大阪、甲子
家庭会。かへれば十一時半。沐浴、読書、前一時
臥床。

六月十四日 木
普講、午前。演習、午後。大学開放ノコト、諸事
命^[じ]置^[じ]くこと。夜、池田、教科書。浜中。十二時臥、
沐浴。
朝早くより夜十二時まで寸隙なし。

六月十五日 金
金曜日にて授業なき日。
此間よりの多忙、初めて気落付く。それでも
2、午後三時 大学開放につきての打合
3、 五時半 和辻教授送別会、大黒ヤ
1、京都府史蹟調査報告メ切
手紙 黒板、国民精神文化、酒井宇宙治〔伊那史談
会〕、島根県。

六月十九日 火
【紫の北門前町 石崎達二君 二十一日帝大ニ伺
フコト】

六月二十三日 土
朝、停車場。

六月二十四日 日

【高井悌三郎】

佐藤君。ミスシュミット来。大丸、午後。夜、赤
松君来。栗栖野瓦窯校正見ル。看聞御記見ル。

六月二十五日 月

散歩、七時一三十分。松木聡二郎氏来。京都史蹟、
栗栖野窯ノ調査、校正渡ス。
都市生活ノ原稿。

六月二十六日 火

【案内記借スコト】

六月三十日 土

岡崎君、朝出発。

大阪女専。

幕末に於ける革新的傾向

一、対外事情

二、甲比丹著書

三、十九世紀初ノ世界形勢変化マテ^[テ]

黒表紙ノート

七月一日 日

朝より用意する。夜行にて東京に行く。十時
二十三分か。

後記。

七月二日 月

朝九時東京駅着。暑さ甚し。駅ノ休憩室下ノ喫茶
店にて清涼飲料のむ。目黒より自動車にて研究所
に入る。十時十分前。十時二十分より講義。

中食。講義、歴史学発達。

七月三日 火

九時半ホテル発。暑サ甚シ。自動車。十時十分着。
講義 歴史学、教育的ノコト言ハントス。歴史学
認識ノ三段ノ発達。

七月四日 水

【両角喜重氏、手紙かく】

七時起、九時五十五分ホテル出発。十時十九分研究所着。

講義 足利時代、下剋上、在り方、延喜式、看聞御記。小山、淡輪、菅生、和田。

地方的相扶ノ感情。

前草^{〔草〕}に出ル。

七月五日 木

研究所講義なき日也。朝より宿にゐる。

十一日記。

七月六日 金

【延喜式 政治的意味アリ。下剋上ニ社会的意味アリ】

朝、講義。室町時代、下剋上ノコト終ル。

午後、共同研究会。予、発表。封建制度社会の精神。夜、鈴ヶ森ノ小町園にて京大関係の精神文化研究所関係者の会合。今野、青野、藤井、尾崎祇臣、森下、吉田、筒井、杉本勇三。

十一日記。

七月七日 土

【七日付、浜松市教育会石原嘉太郎氏、八月一日、二日両日講演ノコト書状来ル】

研究所坐談会。

歴史研究界新刊、左翼ノモノ。

歴史教育ノ問題。

夜九時二十五分東京出発。吉田、森下、藤井、青野、今野見送。

汽車中涼しくよく寝る。

七月八日 日

八時^{〔ママ〕}京都発。家に入れは赤松俊秀君^{〔は〕}来りてあり。丹後熊野社田楽調査ノ相談。午後一時五十八分にて行くことにする。

午後一時五十八分にて二条駅出発。炎暑甚しく、車中三十六、七度となる。五時半頃河守。宿、内宮のかめや。天の岩戸見る。夜、小野社司宅に寝る。涼気、暑を知らず。

七月九日 月

【九日附、岡久穀三郎君来状】

朝、六時起床。七時半出発。北原村まで人力車にて行く。田楽撮影。二時半出発。三時四十五分宿かめやにかへる。四時四十分出発、福知山駅。八時^{〔著〕}京都著。

七月十日 火

朝、あつし。松木君電話あり。

中村直勝氏来る。三浦文庫につき三浦家より塚本氏に譲ること断り也。

午後、藤直幹君来。

七月十一日 水

朝、大阪より山野運一氏、牧野安太郎両氏来る。小学校の国史の説明図のことにつきてなり。

午後、大阪精華書房来る。教科書ノ依頼断る。

文部省有□講習会のことなり。

住友吉左衛門君手紙カイロより。

夜、梅原末治君、和歌山ノ史蹟調査ノことなり。

午後、藤直幹君、国史研究室通信持参。

大工、工事、台所棟上げ。

七月十二日 木

【前田一良君】

七月十三日 金

【十三日付山根徳太郎君来状。丹羽三郎氏より平安京の瓦返却方交渉のこと。丹羽氏手紙封入アリ（十日付）／金丸二郎君、林田区宮川町二下川方】

森田久造氏。

八瀬村長 山本長四郎氏、外一人来ル。千代間虎之助氏、吉田上阿達町。

七月十四日 土

朝、自宅。

午後、柴田、シュミット。シュミットに書物二冊カス。①シャパニース②シュリーケー論文集。

小葉田君来。

七月十六日 月

朝。

二時半、大阪天守閣。

大阪宅による。浜中寛淳ノコト天然寺にて言ふ。

十時半、天然寺発。十二時京都宅着。

七月十七日 火

【外交科 1) 80 2) 70 3) 80 4) 66

5) 77 6) 63】

朝、外交科ノ答案採点。研究室に池田、出雲寺、野村待ツ。書留にて送らし、十一時頃研究室。中食。池田、出雲寺^(路)。四時かヘル。

七月十八日 水

【肥後和男君、病める子をみとる夕べしはやくあけて小雨の窓に佇に□り。狭霧なる病院の窓よ大川のあしたたゆたふ水の色かも】

昼。

夜、行政科ノ試験答案。十二時過マデスル。

七月十九日 木

【渡辺幾次郎、春畝公追頌会。麴町区一ノ三大阪ビルデング二階】

【行政科試験採点。向フヨリノ通知状ノ裏ニ点数ノ写トル】

午前、行政科採点。

午後、大阪市役所、四天王寺に行く。今井、魚澄、堀居、松木、衣笠。五時頃京都かへる。

夜、灯火管制。池田源太君来ル。

七月二十日 金

【本日ハ岩倉公墓前記念祭ある日なり。案内ありたり。不行】

【古文化研究所、奈良一五三二番】

大学に行く。

新聞部に行く。

羽田部長に会ふ。石川丈山ノ朝鮮使節とノ問答書ノコト、柴田君ニ言ヒ置ク。五、六十一百円ホトノモノ也。

八瀬村長来ル。村誌ノコト也。

夜、赤松、柴田君来。

赤松君 国司文書ノコト。

柴田君 休暇ノ日割ノコト、綿谷氏ノコト頼ム、丹羽氏ノコトモ頼ム。

七月二十一日 土

【長の師範清水暁昇〔長野県師範学校長〕、二十六、二十七日講演ノコト、十一月。大覚寺より書状、三好龍彰師。古田良一君転居通知、北一番町六四】

午後、手紙整理。

東京後藤朝太郎氏より、瓶史にのりたる小生ノ話〔瓢亭夜話』『瓶史 夏の号』去風洞1934.7)、琉球の貝殻窓のことはいつこの見聞なるかとの問合せあり。且つ江蘇地方の田舎の風俗に似るとのこと、去風洞へ問ひ合せあり。これに返事。尚侯爵邸の話なることを返事する。

来信、矢^(野)の。

七月二十二日 日

書斎整理。

来信 三宅正三、日野一成 岐阜県関町、武居、三好龍彰。

七月二十三日 月

【両角氏来状】

朝、教科書かく。午後、炎暑、休憩。夜、赤松氏来ル、国司。

七月二十四日 火

研究室に行く。午前午後、在室。思想全集読む。有働、鈴木祥造氏来。

七月二十五日 水

【裁判所。内藤先生月忌、十時法然院。八瀬村長。大覚寺三好龍彰師】

朝、裁判所ハ通知来らず。九時半宅を出て自動車にて法然院に至る。内藤博士初月忌、十二時半終る。帰宅、小憩ノ後、二時半出で、八瀬村役場に至る。七時村役場より自動車、電車。八時かへる。大雨。大覚寺三好氏六時ニ来ル。八時まで待つて来らる。

七月二十六日 木

大覚寺長距離電話。

七月二十七日 金

【三百七十円調】

灯火管制の日。

午前、大学研究室。図書館より思想全集借り出し研究室にて読む。夕方もち帰りて読む。夜、大島徹水師来。灯火管制、暗闇にて特別の電灯をつけ、火をくらくして談話。

大島師帰る後、読書。十二時過ぎること大分多し。何時頃なりや判らぬ。時計を見ずに寝る。

追記VⅢ-12

七月二十八日 土

【午前一〇、二〇（不定期急行）、一時十分名ごや、一時十八分同発、午後二時五十八分三留野、飯田町】

【雲一すじ 五千尺の峠 くれのこる】

朝、旅の用意。十時二十分急行にて信州飯田町に向ふ。名古屋にて接続する列車と思ひしに、さうではなくて名古屋駅にて一時間以上待つ。駅は実にあつし。後にて聞けば百度に上りしと云ふ。

三留野五時二十分頃着、三十分まちて乗合自動車出る。満員にてゆられつゝゆく。二時間を要して飯田町に八時十五分つく。途中の景色は壮大にして五千尺の峠をこす。蕉梧堂ほてる。

七月二十九日 日

【下伊那、飯田町。講堂、飯田中学校。広くして奥行長し】

蕉梧堂ホテルには小唄の市丸、小説家長田幹彦泊つてゐた。

午前八時半開講、十一時十五分まで講義。日本思想史。

八時半—十時。十時—十一時十五分。

聴衆四、五百名、声を上げる(↑)ことにてあつし。

午後三時頃宿を出て、天龍峽に向ふ。自動車にて行くこと三四十分にして、天龍峽の龍角巖(巖)につく。俯瞰して天龍川の急流を見る。巖ハ水面より直立して二十間ほども立つ。日下部鳴鶴の天龍の名所の岩に刻せる文字あり。仙床台カ〔仙牀磐〕などあり。かへり夕食、夜十二時過臥床。

七月三十日 月

【下伊那教育会。午後出発。木曾福島、上諏訪】

午前八時半講義。十二時半頃までつゝける。これにて満講。

午後食事後談話。三時頃出発。辰野に出で、辰野より上諏訪に至りて下車。人力車にのりて湖畔の布半ホテルに入る。諏訪の湖を窓の前に見る。暮れんとする湖面も連日の雨気に水色悪しく、雲低くたれて湖上の舟も少なくして情景淋し。

食後町を散歩。御祭ありて余興をしてゐる。疲れありしを以て、涼しけれとも読書もせず寝る。十一時。

〔挟み込み紙片—旅程、時刻書き付け—省略〕

七月三十一日 火

【浜松着。浜松市伝馬町小松屋本店。車中あつし。

浜松ハ割合にすまし】

朝早く目覚む。六時頃起き出で、一浴、朝食の後、手紙かく。

国民精神文化研究所 時間割ノコト。

吉田三郎君 礼ノコトナド。

九時過、上諏訪出発。甲府正午、見延電鉄によりて富士駅に出る。途中電報うたんとしたれとも、見延電鉄ハ食事売ルトコロも電報取扱駅もなし。

静岡を通りて浜松駅、六時五十幾分。山東校長〔^{格之進}静岡県立女子師範学校〕、^{福藏}徳丸君〔同校教諭・国史30卒〕、石原嘉太郎氏に駅にて逢ふ。小松屋に入る。

8-12カ追記。

八月一日 水

【午前九時半開会】

午前九時十五分。浜松市元城小学校に行く。宿より遠からず。九時半より講義。聴衆三百名。十二時まで講義。

午後三時頃より浜名湖畔の弁天島に行く。教育会の幹部・校長等なり。賀茂真淵の血縁の家と云ふ岡部某と云ふ校長もありて、子息の国文科学生のことしきりに談しあり。

湖上にて打あみな^どとして十時頃まで会す。湖水の風涼し。暑さを忘るゝによし。十二時過まで読書。臥床。

八月二日 木

【浜松より五時五十幾分の特急にて西ニ下ル。七

時名古屋下車、十一時五十七分ノ上り列車を待つ。

〔^{普願}正隆、道、これにのりてゐる】

九時十五分、元城学校。講義、十二時半を過ぎる時まで。〔^{高柳覺太郎}浜松市長も来会。学校にて昼食。

其より宿にかへり、井伊谷神社参拝。一時間ほど

かゝる。井伊氏蟠居の地にして四周山を以て廻らし別天地である。南朝の忠臣の居住地の型をこゝにも見ることうれし。冷譚寺〔龍潭寺〕ハ見ず。それより〈 〉寺。観音と不動二体を見る。観音ハ藤原、不動ハ藤原末鎌初。又、織殿を見る。加止利を織りて伊勢に献したるところ。織殿ハ窓なし。常陸風土記の烏織の記事を思ひ出し興深し。

八月三日 金

午前七時御殿場駅着。青柳博士見かけたれど其内に見えず。バスにて富士山麓に向ひ、籠坂峠にかゝり森林帯の美しき景色を見る。山中湖にて十五分少憩、それより十時頃河口湖畔、朝食とる。十一時これを渡りて西湖を又わたる。二時根場につく。一時間ほど待合す。三時過雨来る。精進湖の赤池につけバ雨脚速し。精進湖わたりて四時過精進湖ホテル。夕食後、くもはれて富士山嶺をあらはす。七時臥床。あすの天気^ぶを^めあやふみなから。

八月四日 土

四時頃目覚む。月明と黎明とによりて富士の山容窓前に迫る。薄紫色を呈して端麗の姿である。

五時前宿を出て、パノラマ台に向ふ。二十三町なり。途にて写真とる。逆富士とて湖面に富士逆に影をおとすところあり。パノラマ台に七時過着。七時半下山。九時宿にかへる。

十時半宿出で、精進湖を再び渡りて赤池に着き、乗合自動車待ちて（十一時半の）大宮町に向ふ。八里と云ふ。途中、白糸滝、及音止めの滝を見る。この辺あつし。二時大宮、富士を経て、弁天島六時頃下車。夕食、夜泊る。

八月五日 日

浜名湖を渡りて新居に至り汽車にてかへる。京都着六時。

八月六日 月

朝、出雲路氏来る。
午後、来客。向坂、西村教諭、田中達男。

八月七日 火

朝九時、山科厨子奥の四手井彦四郎氏。
所蔵文書調べに行く。出雲路、柴田、時の谷^(野)、福井諸氏。
夜、来客なし。あつき日なり。
田中達男君、百科辞典訂正せず。翌日来らることを言ふ。

八月八日 水

【杉岡憲一〔国史32卒・沖縄県女子師範学校教諭〕、沖縄県島尻郡真和志村古波蔵楚辺原一四五八ノ八】
朝、田中君原稿見る。高文試験答案見る。
午後、研究室。時の谷教授^(時野谷常三郎)、赤松智城君、牧健二教授、来室。
夕方帰宅。高文答案。夜十二時までかゝる。

八月九日 木

朝、高文答案採点記入、発送。河原孝君、国司文書の考証、送ル。
一時三十九分燕にて名古屋行く。四時二十五分塩尻行く。九時二十分下諏訪行く。亀ヤホテル泊。十二時過。

八月十日 金

朝六時^(ママ)臥床。七時九分下諏訪発。八時過伊那着。九時半学校。十時開講。十二時過まで。
夜十二時過臥。雨ふりて嵐となる。

八月十一日 土

朝、早起。九時過学校。十二時四十分まで講義。雨しきりにふる。三時半出発。雨あかる^(が)。五時塩尻。七時長野。八時半長野発。安代十時。ますや泊。渋温泉には宿のあけるものなし。

八月十二日 日

朝六時起床。睡気多し。温泉に浴し、午後少睡。後、夏祭りにて花火あり。

八月十三日 月

朝六時起床。午前小憩。午後、部屋変らせられる。暗き部屋にて仕方なし。上林温泉まで行く。それより地獄谷見物。四時半帰宿。七時立ちてかへる。

八月十四日 火

朝十時三十七分京都着。
午後、中村喜代三君来る。台湾大学新任教授ノコト。三浦文庫のコト。
松木聡二郎氏電話。十五日大阪にて委員会のこと。

八月十五日 水

【島根県へ電報。京大旅行ノコト。伊津野。奈良古文化ノコト。大阪】
大阪に行かんとしたところ、高井悌三郎氏より電話あり、会ひたしとのことゆえ待つこととす。待てとも来らず。南禅寺の桜井景雄君のところに電話にてたづね^(ど)などする。大学にて高井、桜井氏待ち居ることを知る。会はず。
信、郵便局にやる。電報うつ。貯金のコト、同様つかはず。葉書三枚投函。一時より大阪天守閣会議。十二時半、大阪宅ニ入り昼食。自動車にて天守閣へ。四時了。大阪宅。

八月十六日 木

大阪宅。せかき^(施餓鬼)用意。

八月十七日 金

盆せかき。

八月十八日 土

朝、原稿かく。午後、あやめか池に行く。夜十一時、難波〇万にて夕食。

八月十九日 日

立川宇蔵氏死去ノ報を新聞にて見、淡路町ノ宅ニ
弔問。京都にかへる。十二時。来客あり。

八月二十日 月

午前八時三十七分二条駅出発。午後五時十七分松
江駅着。皆美館泊。岡田恒輔氏〔文部省督学官・精研
所員〕同車。

夜、宍道湖上舟遊。月ありて秋気室に満つ。

外務省佐藤〈 〉氏同船。

八月二十一日 火

講演。高等女学校、修理中なり。校門にて下川秀
樹君〔国史30卒・島根県立松江中学校教諭〕に逢ふ。中
にてハ山本清氏〔国史34卒〕逢ふ。十時より十二時。
宿にかへる。

三時、ヘルン旧居見る。夜、松崎料亭にて京大卒
業生の宴会。原弘二郎〔西洋史27卒・松江高等学校教授〕、
今石二三雄〔東洋史28卒・同前〕、村中八郎〔西洋史
29卒・松江中学校教諭〕、下川秀樹、山本清。

十二時過臥。

八月二十二日 水

九時より講演。十一時十五分了。昼夜、山本、村中、
下川。

午後三時過、坐談会。

夕食。学務部長熊野周二氏〔島根県学務部長〕其他。

夜十二時まで出発用意。

八月二十三日 木

朝五時半起。大社参拝。鳥取下車。城下町ノ旧屋
敷の残れるを写真とりにゆく。あつし。

夜十時十一分二条駅着、帰宅。

八月二十四日 金

朝、読書。午後、研究室。夜十時臥。

八月二十五日 土

朝、海印寺村長来、乙訓郡史ノコト。

林稲苗。

大阪精華書店。

矢野禾積〔台北帝国大学教授・義弟〕来。

読書。原稿作ル。

八月二十六日 日

【西村虎之助〔京都府師範学校教諭・兵庫県立国民精神
文化研究所〕。武藤氏来】

朝、読書。用意、旅行、東京行ノ。

八月二十七日 月

【京都出発、午後一時】

日本古代法積義借りる。

午後、出発。

八月二十八日 火

講義。室町時代より近世。

八月二十九日 水

近世封建制成立。

八月三十日 木

講義。近世封建制度社会ノ内容。

午後、坐談会。自然愛ノコト。

夜、吉田三郎君宅招かる。志田延義氏同席。十時
マテ居ル。

八月三十一日 金

魚澄君宿ニ着ク。益田邸、久原邸、博物館長杉栄
三郎氏、訪問。大阪天守閣ノ借用品ノ為也。

午後三時過かへる。

夜、肥後和男氏、牧野信之助氏来宿。

魚澄君とともに談し、十一時まで居たり。

九月一日 土

文部省に行く。

古社寺保存課。

荻野仲三郎氏不在。

丸尾彰三郎氏ニ会フ。扇面古写経、藤田男、故武藤山治氏蔵し、久原家ニナシト云フ。

藤井甚太郎。

山枏儀重。

上田三平。

古谷清。

上司暢、周防、東大寺領ノ上司也。

文部省ニ来合せたる人。

午後三時京大、中村一良〔国史30卒・東京府立高等学校教諭〕、吉田三郎、藤井謙三〔西洋史29卒・愛媛県立松山中学校教諭・精研教員研究科第四期生〕、今野善胤〔国史30卒・滋賀県立彦根中学校教諭・同前〕、青野久親〔西洋史28卒・愛知県小牧中学校教諭・同前〕の諸君と山水楼にて会食。魚澄君共ニ也。

九月二日 日

朝九時東京駅発。午後四時二十分京都着。夜、整理。

九月三日 月

朝。午後暑くなる。夜、散歩。

雑誌等読む。向井氏、塔之島等。ドルメン、歴史教育、歴史公論、史蹟〔産〕と美術。

日中ハあつし。

九月四日 火

朝、調査。けふは朝涼気ありて研究読書の欲進む。

昼四時頃より赤松君。夜、赤松智城君来。

九月五日 水

【九月五日付、古文化研究所ヨリ京都兵庫大阪ノ南朝遺蹟調査ノ費、九百円送り来ル】

原稿少し。大工宮本。〔濟一〕谷井氏へ電話。午後、大阪天守閣。夜、原稿かく。

九月六日 木

【十月六日付、長崎商店ピナテール店、記録問ヒ合セ】

朝、内藤先生筆蹟探す。午前、菅忠芳氏来訪。昼、藤直幹君。夜、柏倉亮吉君〔国史30卒〕来訪。習字。

九月七日 金

朝、手紙、松木、杉氏へ。

午後、外出。銀行安田、文化研究所、椅子、戸、注文、資金トリニ行ク。

出雲路通次郎、小川勝〔国史32卒〕、田中稔〔国史35卒〕ノ諸氏来訪。新新聞部委員紹介。佐藤虎雄氏来。大阪行準備。日本古文化研究所へ手紙。

九月八日 土

【女専。序文。誠所研究。谷川ノコト】

八時三十分出発。十時廿分女専着。魚澄氏、小川氏談話。小川氏ハ和歌山に谷井氏に会ひに行く。

女専。南洋ハ〔イ〕タヒアノ話、和蘭関係の変化、米船来航ノトコロマデ。

湯川松次郎氏〔書籍小売出版業〕、順慶町一丁目、女専ニ来ル。野田屋にて茶のむ。谷川士清研究ノコト引うけて貰ふ。

天然寺。頭重し。夜早寝、十一時。

九月九日 日

【古文化研究所】

九時半大阪出発。十時十五分奈良着。奈良ホテルにて古文化研究所ノ役員会。

〔勝美〕黒板、〔仲三郎〕荻野、〔耕作〕浜田、〔惣五郎〕魚澄、〔濟一〕谷井、〔正雄〕鳥羽。児玉奈良県知事、〔久慈学〕久司学ム部長〔奈良県〕、中村国太郎〔京都府学務部社寺課長〕、〔清一〕岸熊吉、中岡、田村吉永、橋本凝胤、筒井英俊

南朝遺蹟、雪野寺、薬師寺西塔、近畿古墳調査、藤原京調査。

大阪ニカヘリ、京都ニカヘル。十二時臥床。

九月十日 月

【京都府教育会】

朝八時、赤松俊秀氏来。目黒氏手紙。

午後、八瀬村長山本長四郎氏、講演ノコト。^{〔貞吉〕}喜田博士ヨリ電話。事ム室。加藤竹男氏来。

夜、京都府教育会。史学ノ現状。

此頃つかれあり。^{〔阪〕}京坂電車にのりても酔ふ意味あり。

九月十一日 火

朝、原稿。

昼前、加藤竹男氏来。紀州に行かんとする前にて忙かし。井川君より電話。

十二時半出発。

二時四十五分天王寺。二時四十分連絡ある電車にのり遅れ、五時二十分まで連絡のものなし。途中まで乗車のこととし上野芝住宅地見る。五時半東和歌山、六時十一分同駅発、八時半頃白浜口着。椿行なし。白良荘に泊る。

九月十二日 水

【十一日ノコト也】

〔以下、全体に斜線〕

朝起きて紀州の温泉に行かんとす。午前中用事し、十二時出発せんとす。加藤竹男氏来、出発遅れる。天王寺阪和電鉄にてハ二時四十分直通電車に五分遅れたるため富田行に連絡せず、三時四十分乗車。上野芝下車、住宅地を見る。草々のところにて住む気になれず。砂川まで乗継、急行に乗かへ白浜口に八時三十分着。汽車ハこゝ止まり。椿温泉行バスもなし。白浜温泉、白良荘泊。

〔以上、全体に斜線〕

九月十三日 木

十二日

暁頃、寒冷を覚ゆ。感冒となりて咽喉いたむ。午後、崎ノ湯まで行く。午睡したところ風邪ひき添う。夜、原稿かく。鼻カタル起ル。十二

時までかく。並河研究。

十三日

十時三十分宿出で、白浜口十時五十分椿行バス、椿温泉十一時半頃着。室なし。午後、室あく。四時半宿出で白浜口五時二十五分、八時二十五分天王寺、夕食、十時三十五分家ニかへる。風邪ノ為め頭痛。

【□M】

九月十四日 金

【裁判所】

九時半裁判所。鑑定ノ為也。

京都府庁。知事に会ひ史蹟調査ノ事、新規事業依頼し置く。学務部、思想講習会ノコト也。十月中旬とのこと。

午後、柴田実君、時の谷勝君、^{〔野〕}徳重君。

夜、西堀君、石崎君。浄妙寺文書、春記古写持参。読み方質問ノ為也。

国民精神文化研究所、書留到着。

【M】

九月十五日 土

朝、手紙かく。

松田甚之助。竹内勝太郎。藤井甚太郎。今井正洋〔竹野郡弥栄町深田部神社社掌〕。西村虎之助。国民精神文化。目黒書店、原稿うけ取、辞典ノコト。道。

【M】

九月十六日 日

【I序文、II国研批評、III特講準、4八瀬、5並河、6平凡社、7龍大講準】

【八瀬村講演会】

序文、平凡社ノコト。

国研批評^{〔ママ〕}（午後及夜。

明石女師川上操〔兵庫県明石女子師範学校教諭〕書状。兵庫県、国民精神文化講習会。

【M】

九月十七日 月

【午前、特講。午後、教育会。夜、講】

【京都府教育会】

国研、論文考査。今日中にしてしまはんとす。

十八日まで也。十二時迄。

【M】

九月十八日 火

講義休み。国研、考査調べ書く。

羽田氏、打合会ノコト、赤松氏。

十時過帰らる。それより国、^{〔ママ〕}研、研究員論文批評かく。十二時過まで。

【M】

九月十九日 水

【来信 山東善之進〔教育10卒・静岡県女子師範学校長〕、京大クラブ発会式祝電礼状】

教授会。

午前、国民精神文化研究所の研究員論文批評、考査要旨清書して十一時停車場にて特別配達にて送る。

夜、赤松氏、学生中村雄光〔国史35卒〕。

十二時家を出て、

事ム室 京大クラブのコト。

打合会 地理学普講、演習、小牧助教授担任ノコト。宮崎^{〔市定〕}講師、助教授任命ノコト。

出張ノコト（浜田）。藤、秋季旅行相談。

新聞部行ク。

夜、客二人。普講準備、十二時臥。

【M】

九月二十日 木

【中村喜代三、台北昭和五一八】

【電報】

朝、普講準備。風邪少しく残る。十時、自動車にて大学まで。

普講。演習、時事新聞、神武天皇ノコト。

沐浴。

夜、勝谷透氏〔国史33卒〕。別ニ一人。

天智天皇ノコト調ベル。夜中、雨。

【M】

九月二十一日 金

【御影。大津。橋本氏招待】

朝八時前起、雨ふりて風つよかったが、書齋に雨もりかあるので、二階を見に行ったところ、ベランダのガラス障子より雨水^{〔ガ〕}が入って床の上にたまってゐる。紙を敷とガラス障子のすき間につめ、中敷居の上と下とにある障子のすきより雨の漏れぬやうにしてゐる間に風いよへ強くなり、兇暴な烈風となって、母屋と乾房の間の硝子障子の錠を破壊し、また二階ベランダの南うけの硝子障子を敷居とも押し倒し、内側に投げつけた。二階客間は卓子椅子散乱、惨怛^{〔惨〕}たる状態となり、屋根瓦、雨戸を吹きとばして庭の上に落ちてわれる音物凄し。南側の板塀は全部板一枚一枚もきとりて高くまき上げ、跡をとゞめず、この家崩壊することと思うた。九時半漸くやむ。電灯つかず。電話不通。水道のみハ少し出る。

一時、大津に向ひ、神社奉斎調査委員会に列席、六時帰宅。

目黒四郎君来、辞典ノコト話しす。徳重君と共に京極にて食事。十一時帰宅。

【M】

九月二十二日 土

【女専。大阪委員会。藤井博士。二十二—二十三—廿四、大蔵会。叡山。三井寺、専修院講堂】

朝九時出で、大阪に向ふ。バス中にて中村直勝君に会ふ。新京坂^{〔阪〕}に行く。矢張不通。七条大宮にて桂行バスに乗り、桂より新京坂にのりて大阪に入る。十二時つく。

十二時半頃女専に入る。女専は二十五日まで休講。九月中考査なし。

それより天然寺に行く。本堂も地藏堂も、棟瓦、屋根瓦とび、土、屋上に露出して廢屋の^(一)ことし。和尚不在、急き中食して一時三十分市役所、二時半^(重治)島田ノ土木部長、魚澄、今井諸君、藤原九十郎博士とともに、神戸諏訪山ノ橋本嘉藏氏邸に招かる。骨董品見せてもらふ。雪舟一幅、春琴、寛齋ノものあり。山陽の紺紙金泥ノ湊河ノ詩、狩野永真ノ楠公像、林弘文院学士贊のものなど見る。九時まで。県庁前、長崎屋にて宴会。大阪まで自動車にて送られ、十時二十分の汽車にてかへる。十二時也。

【not M】

九月二十三日 日

朝、道電報。暴風見舞状返事。
午後、池田君、山根君来。
夜。

九月二十四日 月

朝、研究室。都市のこと調査。原稿。

九月二十五日 火

【特講。吉田孫一、京大クラブ案内。目黒書状、カード。龍大予習。序文】
特講。
龍大、松本文書 見せて講読。
夜、北野天満宮。谷大答案調。十一時半臥。

九月二十六日 水

朝七時十分前、大倉精神文化研究所山田氏来。
谷大、十二時まで。
教授会。
宮崎講師 助教授。
部長改選 野上教授十票、再投票、十一票。
夜、野中正祥君、柏倉亮吉君来。
普通講義原稿。十二時。

九月二十七日 木

普通講義。
午後、演習。三時半マデ。
山田氏来室。大倉精神文化、金曜日頼むこと言はる。
国史研究会会議、四時—五時半。
夜七時、読史会。^(後雄)大貫〔国史35卒〕、西堀二氏講演。
旅行日程の発表あり。十一時。

九月二十八日 金

八時十分前家を出で、八時三十一分快速車にて大阪まで。大阪より住吉まで電車。
御影師範にて講義。

歴史学の進歩。

一、形式、内容。歴史ノ形態。歴史認識。

二、歴史学ノ特質。普遍特殊。個々事実ノ関聯。
世界的関聯。

仁川に行き大阪にかへる。午睡。疲れやすめる也。
夜、柏本喜造氏礼状。

九月二十九日 土

女専。明治新政来ルトコロマデ。
明治文化史の研究について。幕末外交の諸情勢。徳川幕府崩壊と外交。日本の封建制度。明治新政の由来。
夜八時二十分帰宅。池田、森下二君来。十時半マデ話シス。

九月三十日 日

朝、菅原憲君来。
村山修^(一)二君〔国史37卒〕。
大学研究室に書物とりに行く。
夜、赤松。

十月一日 月

都市のこと調査。教員研究所ノコト。^(ママ)六時半講義。
夜、研究。一時。

十月二日 火

講義。旅行のこと決定。龍大。
夜、散歩ス。

十月三日 水

谷大。
午後、旅行ノコト相談。
二時半より内藤博士記念会ノコト相談。羽田、小島、
那波、梅原、宮崎。
夜、普講義。頭いたし。十一時半臥。

十月四日 木

講義ノコト下調。
講義。演習。
夜、散歩する。頭痛気味あり。肩凝りたり。

十月五日 金

【愛媛県東宇和郡宇和町齒長寺 中井香信】
近頃はじめて朝より家に居ることとなる。
目黒書店へ手紙。午後、国史研究室通信ノ原稿かく。
午後四時半、新聞部。
夜、森下、池田氏来。
大倉。

十月六日 土

朝。
午後一時五十八分二条駅より、赤松、柴田二君同道、
金丸君同車、綾部に行く。村島氏出迎ひうける。
加藤省一氏文書見る。夜、沼田文書。
夜、山上校長〔六郎〕〔京都府立綾部高等女学校〕、今井教諭〔政親〕〔同
校教諭〕、前田一朗君〔良〕〔同〕、晚餐を共にす。十時過
臥床。

十月七日 日

朝七時起床。八時半自動車にて出発。高倉神社に
行く。池田源太君、道にて来り会するに逢ふ。高
倉神社。

山家藩広瀬氏に御世話になる。

四時八分山家発、帰へる。家に六時半着。矢の^{〔野〕}
清原宣雄、舟越君会食。

十月八日 月

用ム山積、整理。
来訪者多し。田中達男、西堀、鹿児島ヨリ下園^{〔盛治〕}〔国
史31卒・鹿児島県立第一鹿児島中学校教諭〕。
電話、吉田孫一、良馬^{〔吉田〕}〔文学部書記〕。
志賀剛氏夫人来訪。
午後、研究室。

大野熊雄君 新聞部をやめ雑誌部にせんとする
こと。

吉田孫一君 柳田講師手当已に渡し終ること。

藤直幹 旅行人員決定ノコト。

時のや勝君^{〔時野谷〕} 通信ノコト、林部^{〔興吉〕}、住友^{〔吉左衛門〕}。

十月九日 火

【仁和寺。龍大。女専答案。住友】

十月十日 水

【深田村黒部。大阪、母法事】

十月十一日 木

【大阪、浜口、兵庫県持行ク】

十月十二日 金

【兵庫県、大阪、京大クラブ、五時半】

十月十三日 土

【精神文化、講ノート。精神史。日向国史】

【朝出発】

午前九時五十分京都発汽車にて三宮駅に至り、台
湾航路の朝日丸にて門司に向ふ。海上平穩。神戸
第一突堤、正午出航ノトコロ、一時前出帆。

十月十四日 日

六時門司入港ノ筈ナルニ遅レテ七時半入港。八時過ランチ。門司駅ヲ午前八時四十分にてたちて東郷駅十時、宗像神社まで自動車、一時まで拝観。国宝狛犬。福岡に着く。二日市泊。

十月十五日 月

雨。水城、都府楼、太宰府。佐賀に向ふ。多久聖廟。佐賀市にかへり^{〔ママ〕}

十月十六日 火

松原神社、徴古館。熊本。偕行社にて京大クラブ。熊本泊。

十月十七日 水

早朝出発。八代、八代神宮、悟真寺。人吉、相良城、横穴古墳。牧園より自動車にて霧島温泉。林田旅館。

十月十八日 木

十時出発。宮崎着、二時。宮崎神宮、古宮也。青島、鶴戸神宮。九時二十^{〔 〕}分夜行にて出発。

十月十九日 金

朝、早朝。富貴寺、^{〔真木〕}牧ノ大堂、宇佐八幡。夜、六時の船。

十月二十日 土

大阪港にては、聯合艦隊入港してゐる。船の上より見て写真など撮る。天満橋よりかへる。三時。

十月二十一日 日

【北里善従〔岐阜県学務部部長〕。岐阜市今小町玉井屋。午後六.〇八一八.五五】
午後六時〇八分京都発、八時五十五分岐阜着。今小町玉井屋旅館。
岐阜県視学水谷儀一郎、師範教諭鈴木武三、二氏

出迎。

十月二十二日 月

【三等特急、前八.一一、岐、前一〇.一〇】
朝、講義。
午後、崇福寺、伊奈波神社、斎藤道三塚。
夜、宴会。

十月二十三日 火

講義。
円徳寺、住職不在。崇福寺、借用ノ為メ也。
二時四十分かへる。

十月二十四日 水

【谷、教も】
谷大、演習のみ。教授会。新聞部編纂会。

十月二十五日 木

【普講。演休。午後京都発】
午前八時半より演習くりかへ行ふ。十時了。帰りにて準備して東京に行く。一時三十九分^{〔 義 〕}つはめにて行く。
途中より雨ふる。九時前横浜に着く。雨風模様、寒し。東横線にて太尾駅。大倉山、精神文化研究所の寮舎に入り宿す。読書。十二時。

十月二十六日 金

【大倉山】
朝七時朝食、食堂にてする。九時より三時間の講義。一時より三時までの講義。
福山修。
日本大学主事、権名正雄。
戸倉廣、京大西洋史。
小野祖教、國学院勤務か。軍人。
東京に出で国民精神文化研究所、吉田三郎君ニ面会、事務にて小生の東上日打合。
大倉邦彦氏宅、晚餐。桜楓会の宮崎夫人、目黒姉

同席。午後七時三十分東京駅出発。

十月二十七日 土

【女専カ】

朝六時二十分京都着。一旦家にかへり大阪に行く。女専。大阪天然寺に一寸より、京都にかへる。新旧部長の歓送会、左阿弥。

十月二十八日 日

【製本。烏丸寺ノ内上ル塩田更生堂。美術史学生
片山喜之^{〔寿藏〕}（植田教授紹介）】

午前、読書。午後二時、研究室ニ書物とりに行く。午後、肥後和男来ル。晚餐。夜、片山喜之君来ル。

十月二十九日 月

【御影。民俗学会】

朝、新京阪にて十三乗かへ御影に行く。^{〔阪〕}坂急御影より徒歩、十時前師範学校到着。

十二時講義終了。寄宿舎にて昼飯とりて一時出発してかへる。三時頃かへる。

読書。夜、民族学会。かへりて特講準備。おそく寝る。

十月三十日 火

【□□、池田】

特講。

龍大、運動週間にて休みなり。

矢野禾積氏、明日台湾にかへると云ふ。夕食をとる。

夜、来客多し。池田、森下、出雲路。角野達堂。

十月三十一日 水

【教授会。新聞部。柳田氏宴会】

谷大、運動週間にて休み。矢野禾積出発につき見送り。

教授会。打合会。

新聞部、義捐金の相談会。伊吹、坂倉、船越、山本修二。

柳田国男、辻善之助、加藤繁三講師慰勞、新三浦。かへり遅くなる。

十一月一日 木

【家屋雑考。国民精神。八代校長先生】

普通講義、問題出す。十四題出ス。

午後、演習。

東伏見伯爵家招待。

疲れあり。

十一月二日 金

八幡法園寺至る。仏像、古文書なし。

大阪天守閣、午後三時。晚餐野田屋。

大阪、天然寺、宿。

十一月三日 土

大阪。書籍買ひものする。建築のこと話しする。七時過ぎ帰宅。

夜、太平記読む。^{〔野〕}時の谷、赤松二氏。十一時前終ル。

十一月四日 日

【古文化研究所役員会】

九時三十八分京都発、奈良電車にて奈良。^{〔俊秀〕}赤松、^{〔野〕}時の谷、^{〔野〕}柴田君同車。宇の仁松窯の子息も車中にあり。

奈良ホテル。

黒板、浜田、谷井、和田軍一、^{〔未治〕}梅原、橋本、中村、魚澄、久慈、岸、等の諸君。

其他、^{〔準二〕}岸本、小川勝、武藤誠、鳥羽正雄、諸君。午餐。其後、法隆寺に至る。浜田、中村国太郎、諸氏。帰る時午後六時頃。

散歩。宮田利雄君来。八時過、九時半。

十一月五日 月

【伊藤只人君〔国史30卒〕来訪。北白河^{〔川〕}発掘。内藤博士準備会。新聞部】

朝、読書。

午後早く、北白河^(III)の発掘に基壇のところ出づとて北白河上終町の現場に行く。中村国太郎課長、^(III)学務部長同道。

三時半、内藤博士追悼会準備会。那波、梅原、小島、大島徹水、中村、其他諸氏。

五時、新聞部編纂会。

特講準備。十二時過。大阪十夜。

十一月六日 火

【学友会。楽友会】

午前、特講。

午後、研究室。来室者多し。宮地直一博士。

龍大、大急きにて行く。教室くらし。

夜、学友会の部長の会。総長の招待。

新聞部。

共済部 委員の希望者なきこと。

野球部 入場料の問題。

牧健二君とともにかへる。

この頃の多忙、息もつゝかず。

十一月七日 水

【四時、西堀】

朝、疲労夥し。大谷大学、休講する。

午後、市役所に行く。北白河遺跡処分の相談ノ為メ也。区劃整理課長岩井氏、^(III)区劃整理組合長会田龍雄氏ニ会ヒ、大学に基壇の一部を移転して保存することとす。

四時、宮田利雄待ツ。西堀君遅れる。六時過まで辞典のこと話す。

七時、大貫俊雄来。赤松俊秀来。野田不美男〔東洋史32卒〕来。

十一月八日 木

【七時過】

【森下、池田】

朝、普通講義急き行く。午後、演習、三時半終る。

夜、池田、森下両君来。十時過までかゝる。沐浴、

十二時臥。

明日、京都府国民精神文化講習所講習ある筈。

十一月九日 金

【国民 八一十一】

八時前離床。自動車にて迎へ来る。師範岡野君〔^(幸三)京都府女子師範学校教諭〕来。

八時半より講義。歴史学ノ傾向のこと。

十一時終り。四条大宮、新京坂^(阪)にて十三に行く。

十二時十五分発、十三午後一時。

武藤君に逢ふ。

多太神社、売布神社に向ひ宝塚にて食事。十時頃かへる。

十一月十日 土

午前八時、京都国民精神文化講習所。

講義、十時まで。氏族制度。

十時過かへる。

赤松智城氏より電話。北白川の遺蹟を見に行く。

現場にては満洲の小林胖生氏に逢ふ。昼食、赤松君と共に本部地下食堂。浜田教授に遺蹟の見本引とりのこと談合。野上部長にも言ひ置く。

大丸、外套注文。赤松俊秀君来、九時半。

十一月十一日 日

朝、赤松俊秀君来。山本亮太郎氏来。羽田教授へ電話。

午後、大阪天然寺、建築ノ相談会。道、同道。

六時半、新聞部見学の一行と渡辺橋かき伊にて会合。

夜十二時帰宅。

十一月十二日 月

【一時—三時】

朝、読書。

午後二時半、大学研究室。遺蹟移転ノコトニツキ

談ス。

羽田教授室。水野梅暁。池内宏。

研究室にて調べもの。

夜、美学学生来ル。

特講準備。沐浴。十二時過臥。

十一月十三日 火

朝九時離床。特講、急ぎ行く。小都市のこと。津と上野ノことまで。

午後、調べもの。三時—五時、龍大。

夜、疲れたり。栗野秀穂君来。臥床、面晤せず。

十一月十四日 水

朝、頭痛大なり。谷大やすむ。

武内義雄君、欧州ニ出帆する前日として京都に来る。

午後、教授会。四時頃武内君と研究室にて逢ふ。

臥床。

十一月十五日 木

普通講義、休。

午後、京都府国民精神文化研究所。^{〔ママ〕}森下君迎ひに来る。熱ありて二時間講義つゝかず。

夜。

三時演習。三時—五時。

家ニテハ宮田、西堀君待合。

夜、読史会。十一時マデカゝル。

十一月十六日 金

【一—三】

朝、休養。

午後、京都府国民精神文化研究所。^{〔ママ〕}一時—三時。

^{〔勝郎〕}藤森三中校長面会ニ来ル。

面会者アリ。

五時マデ西双ヶ丘住宅展見ル。

夜、京大クラブ役員会。

風邪気味尚ほ癒えず。

十一月十七日 土

女子専門学校。電車中読書。

風俗矯正。旧陋一新ノトコロ。^{〔ママ〕}次ハ

住吉、堺ニ行ク。連日ノ疲労ヲ慰せん為メ。

大阪天然寺。風邪ノ気味アリ。早く臥ス。

十一月十八日 日

大阪。風呂にも入らず。

午後三時出発。電車。松木氏ニ逢フ。六時京都。

陳列館ニ行キ、北白川遺址ノ基壇工事見ル。十一時帰宅。

手紙かく。目黒四郎、原田亨一宛。

十一月十九日 月

【九—十一】

朝、手紙かく。黒板、牧野信之助。

午後二時、電話かける、陳列館。

四時、プリント屋来ル。講読用ノもの渡ス。実朝の自筆書状、頼経のもの。

夜、研究室。図書館に書物借りに行く。

かへりて沐浴。二時頃まで講原稿かく。

十一月二十日 火

特講。小都市ノコト、都市集中。都市の個性発生すること。次は都市個性。藤岡。史料として書ぬき。

午後〇時半マデ講義。

以後研究室、来客多し。

向井芳彦。

渡辺政太郎氏妹。

松村春雄。放送局、明治天皇御製ヲ説明シ放送スルコト、荒木貞夫、千葉胤明氏ナドト組ミテスルコト頼ミ来ル。断リタリ。

龍大四時半、一旦帰宅。

夜、羽溪、赤松二君、新三浦にて会食。十時半帰ル。

湯山永保氏〔経済学部36卒〕ノタメ紹介状カク。アス谷大。一時臥。

道、東伏見伯爵家ニ行ク。サガ高田勝次氏へも行く。

十一月二十一日 水

【天気よし。晩秋ノ晴レタル天気ニ心地爽ヤカ也】

谷大、午前。講、海外交通ノコト、家康ノ外交政策マデ。演習。

村上直次郎氏、楽友会館保留ノコト。国民精神文化研究所、手紙。

午後、研究室。北白川遺蹟ノ基壇ヲ陳列館ノ正面にて再造して保存スルコト植政スル。之レヲ見テ注意ヲ与ヘル。

事務室。京大クラブ総会ノコト。坂口教授記念事業ノコト。会場ノコト。

新聞部編纂会、美術座談会ノコト。

岩城隆利君来。

写真整理。

国民精神文化研究所、電報。十二月三日初メルコト。

十一月二十二日 木

【講義。午後、演習。陳列館開放打合。美術座談会ノコト。夜、本部会食】

夜、本部にて今村新吉教授、和辻哲郎教授、送別会。^{〔文太郎〕}足立名ヨ教授の卓上演説あり。現職を減食、退職を（大食）とし、休職を^{〔給〕}救食、囑託を食卓、定年制をまづハ定食として話され、人の^{〔解〕}膊^{〔解〕}をとく。

十一月二十三日 金

【晴天。学会】

午前九時。内藤博士追悼会。家政女学校。自動車にてかけつける。

午後一時、史学研究会大会。石原謙、原田淑人、天沼俊一、諸氏講演。夜、晚餐。帰り遅くなる。中途、大丸ニ行ク。大学事ム室ニユク。

十一月二十四日 土

【学会】

朝、自宅。

一時より読史会大会。聴講者百^{〔五カ〕}十名。

夜、京大クラブ総会。出席約二百名。

十一月二十五日 日

【京大クラブ大会】

守屋氏宅展観。

午後、国史学科出身者茶話会。五時までかゝる。帰宅いそぎ信州行の用意して、京都ホテル。総長招待の京大出身校長等の会。

八時十分急行にのるため停車場。清水暁昇氏〔哲学科19卒・長野県師範学校校長〕とともに。

十一月二十六日 月

【信州講演】

朝七時着。犀北館にて休養。一時より講演。

夜、京大出身者の会。犀北館にて。

十一月二十七日 火

【信州講演】

朝九時より講演。

午後一時—三時過まで。

自動車にて戸倉温泉まで。笹屋ホテル。自動車にて走る高原の風はいつもながら気もちよし。高山の天空に傲る形もなく横はってゐると云ふさまのところ気に入る。

笹屋につく頃雨来る。傘借りて市一巡する。

加藤竹男君ノ著書〔『国学者谷川士清の研究』湯川弘文社1934.12〕の序文かく。

十一時五十分出発、姨捨駅〇時二十分発。自動車にて二十五分ほどにてつく。夜中とて急ぐ。

十一月二十八日 水

朝十一時京都着。途にて中食。一旦家にかへり、教授会に出る。

講師ノコト 国史ハ未だ講師の名を挙げず。

京大クラブノコト

新聞部主唱ノ風水害被害学生への義捐金ノコト 質問をうける。

京大クラブについては浜田教授より、又、天野その他の教授より、新聞部のことについては小島教

授より非難的の言辞多し。しかし此等の仕事は、^{〔が〕}両者とも目下悩める人々のために我等が為せるものである。非難する人は、只自分の立場からする論のみであって、悩める人々に対しての同情感薄し。菩薩の行を知ることなし。

つゞいて史学科打合会あり。国史の講師の給を減せんとする意向多し。これも、国史学近頃の活動と興隆に対して逆行するものか、或は又、抑圧せんと意図するもの歟、吾れこれを知らず。

鈴木虎雄待合せありて大学院学生紹介せられる。大層お待たせして済まざることであった。

帰ること遅し。読書、講義準備、一時半臥。

十一月二十九日 木

朝、講義。兵糧米徴収、玉葉、東鑑、朝廷策、兼実ノコト。国衙官人に^{〔て〕}まて手を^{〔は〕}のはす。鎌倉幕府勢力完成。

小野正康〔精研所員〕・森下真男両君、研究室来訪、食事。

演習。

研究室訪問者多し。

四時半、五時半、帝展大急き見る。

夜、帝展を語る座談会。新聞部主催。植田寿蔵、源豊宗、太田喜二郎、鹿子木孟郎、中村大三郎、都島英喜。

十一時かへる。沐浴。十二時過臥。

十一月三十日 金

大阪十一時より委員会。

朝、起きたれど少しつかれたり。十時前家を出で、十時半乗車。食事して大阪の家に行く。夜、用事多し。

十二月一日 土

【風俗改良。註違条例。刑法改正。苔杖ノコト】
大阪。九時目さむ。近ごろの多忙にてよく睡むる。女専、十時四十五分。講義。一時過、岸本君より

電話。天王寺、塔の地盤発掘中につき見に行く。法隆寺管長、高安六郎博士、大脇正一氏。

八時半京都着。加藤竹男君来ル。序文催促也。十時頃より序文かく。せい書すると一時半になる。

十二月二日 日

朝より東京行き^{〔の〕}準備する。

午前中ハ講義のこと考へ、荷物整理。午後、続行。高島寛我氏来る。

夜。西堀一三君。赤松俊秀君、荒見河^{〔河〕}みそき場ノコト。

九時十五分汽車。駅にて柴田君より淡輪文書うけとる。

汽車中、同車。

大島徹水師、増上寺。福井利吉郎教授。川^{〔河〕}鱈実英子爵。小林忠次郎、博文堂。

十二月三日 月

朝七時十幾分、品川につく。京品ホテルにて少憩。湯に入り、三十分ほど読書。自動車にて研究所に行く。

講義。史学ノコト。歴史学となること。

午後三時頃まで研究室にて話しする。かへりて午睡、五時まで。

読書。あすハ講義なかるべしと云ふので、夕食後書物買ひに行き九時前帰宿。十二時臥。

十二月四日 火

八時半起る。よくねむる。自動車にて議会まで行く。けふ講義あるのところ、議会の見学にて休みとなる。

九時二十分参集、十時十五分開会、貴族院見学について行く。田中^{〔愛橋〕}館議員の北海道日蝕に於ける費用を政府より支出すること建議、松田^{〔源治〕}文相の答弁あり。これにて休憩に入る。十時四十分。

午前、午後、^{〔Wilhelm Dilthey〕}デイルタイ生ノ哲学読む。

史学史のことまことめんとす。史学発達^{〔ママ〕}階段につき考へる。三階級ノコト考へル。夜遅くまでかゝる。

十二時過ぎ臥床。
正午前より雨となる。

十二月五日 水 大雪 後晴れる
朝起きれば大雪。八時過起床。九時四十五分出発。
自動車にて。十時十分着。十時講義。

史学^{〔ママ〕}発達階段。

ベルンハイム 客観、ヘーゲル 主観、
Breysig。

吾人ノ考。三段。

史学史ノ意味。

コレニテ時間来ル。日本史学ノコト言ハズ。

午後少憩後、宿にかへる。三時より読書。淡輪文
書調べる。

夕食後、年表、書物など買ひに行く。一時過臥床。

十二月六日 木 晴
朝七時半起、八時^{〔ママ〕}―九時四十分まで読書。九時
十五分―四十五分まで読書。

自動車にて、十時十分。

講義。

淡輪文書、展観。

足利時代と近世。

足利文化ノ特質。物質と精神。岡倉覚三、原勝郎、
銀色。

淡輪氏ノ盛衰。

後醍醐と其御周囲。新学と花園院。

午後小憩後、史料編纂所に行く。^{〔善之助〕}辻所長に会ふ。

石清水八幡文書、写真ノコト頼む。野上文書ノコ
ト聞く。

四時、岩橋君逢ふ。夕六時京大出身国史出身者、
文化研究所研究員会合。

夜、十二時半臥。

十二月七日 金 快晴

七時前起、早起。七時半より八時四十五分まで読書。

目黒氏より電話。精神文化研究所より電話。けふ

は八時より講義あるところ、失念して十時よりと
思ひ居た。電話にて初めて知った。

十時、自動車にて行く。

南北朝

宋学と個人覚醒。

自^{〔得々〕}□、自らを高める、批判心。

人材登用、奢侈と個人主義。

下剋上。

主観的、客観現実界ノ変転。

精神が精神に語るもの。

足利ノ諸芸術。

都市

都市発達ト足利時代。

都市ト反封建制。

日本都市。都市ト封建諸侯。

富山、会津、江戸ノコトマデ。

合同研究会。午後一時半。志田助手ノ神楽について。

四時過一大倉氏へ。五時過一目黒四郎君会談。六

時半、七時、帰ル用意、荷物整理。七時半、会館

出発。八時一〇分沼津行汽車―熱海下車。万屋旅館。

十二月二十四日 月

【十月廿日、秋田県立角館中学、戸沢佐明、字カク】

十二月二十五日 火

【讃岐ノ勤皇事蹟 → 十一月十二日長町與彦】

十二月二十六日 水

【長の県学ム部長、長船克巳、課長樋口長衛、清
水暁昇】

【^{〔施〕}布セ町菱屋西二七 島邑治】

補遺

山本清、小葉田淳、風害、藤井駿。

九月、金沢関丈夫。

三重県員弁郡白瀬村本郷四二 藤田一男。

京大クラブ祝詞 小林良斎、松崎伊織。

〔以下、挟み込み紙片〕

服部^(親)奉公会 六百万円。

金関博士 台湾大学転任。

佐伯定胤 唯識学、文義集聚ノ過程。十月二十二、二十三、二十四。

〔素直〕
木村助教授 休講。

予算問題ノコト 営繕費ヨリ少シツ、出スコト。

教官出張 野上、^(勝二郎)岩井助教授。

図書委員 和辻、小島。

地理学ノコト。

〔以上、挟み込み紙片〕

〔挟み込み紙片 「和辻教授関係大学院学生一覧」一省略〕

月日

2/20～3/6 学年試問

〔以下、ローマ数字は月を、アラビア数字及び漢数字は日を表す。事柄記載のある日のみを書き起こす〕

Ⅲ 8 卒業生成績報告

12～14 九時口頭試問

15 卒業生成績協議会

16 選抜試験

22 協議会

30 卒業式

予定一覧表

I

22 新聞

23 新聞 龍安寺行

24 /大阪ノ調査/読史会委員会フ/植田/

26 壬戌組合

27 (土) 大阪、和歌山、坂口家法事

28 (日) 弘法

29 大阪 弘法

II

1 神戸

5 新聞 宴会

15 講義終

16 師範大学案

19、20 弘法大師講演

20 試験

21 那智行

22 神戸

24、25 徳島行

III

30 卒業式

31 教授会

IV

23 学務部長出発

24 二回生召集

25 教授会

27 大妃殿下御成

28 女専

29 (日) 大阪講演準

V

4 奈良女高師

6 広島 京大クラブ

8 □□□原稿

10 新聞部打合

13 ピクニック

14 東大史学会

20 新聞部ピクニック

VI

二十日 (水) 東京行

二十一日 (木) 黒板氏打合

二十九日 読史会

VII

国史講義原稿、伊那郡、教科書、史学史、上代文学、都市研究、日本文化概要、封建制度精神

1 (日) 綾部—田楽調査 京ト出発

2～7 東京

7 土 東京出発

8、9 丹後

8 日 田楽調査

9 田楽調査	20 普講、演習 (近江朝廷予習) 夜大阪	
16 伊那 大阪	21 兵庫県/大津/	
19 大阪	22 藤井博士肖像画贈呈式、天守閣 橋本邸、	
25 内藤博士月忌 八瀬村	女専	
28 京都出発	24 祭日 夕	
29 (日) 八時開会	25 特 龍	都1
30 下いな	26 谷 教授会 魚澄	
八月	27 普	
乙訓郡、坂口、山田文昭序文、内藤紀念論文、神	28 兵庫県	兵
崎古墳序文	29 女専	
1 九時半開会	十月	
1、2 浜松	1 京都	△
3、4 富士	2 特	都2
9 京都出発 后六〇〇辰野	3 谷	
10、11 上伊那郡 箕輪屋 九時半	4 普	
11、12 (日) 又ハ 六〇〇辰野駅	5 兵 (新聞部)	兵
14 京都帰着	6 綾部山家採訪	
15~18 大阪	7 (日) ”	
20 朝出発、五時松江	8 (京)	△
20~22 松江	9 (特) 高倉神社祭礼	都3
21 一〇時	10 (大谷) 黒部弥栄神社祭礼	
22 四時迄	11 (普) 赦免地踊 (八瀬)	大
24~26 自宅自修	12 (兵)	兵
27 国精10-12 午前出発、品川迄	13~21 旅行	
28 国精10-12 坐談1-3	13 (旅行) 陳列	
29 国精10-12	14 (日) 陳列	大
30 国精 坐談	15 陳列	△
31 金 東京、大阪市用事	16 成績呈出	
九月	17 祭日 運動週間	
1 大阪市用事	19	兵
2 (日) 大阪市用事 出発 京都着	21 (日) (新聞部)	
5 大阪天守閣会議	22 月 京都府 岐阜県	△
8 高等文官試験 口頭試問協議会	23 火 岐阜県	都4
9 日 奈良ホテル (女専)	24~27 大倉精神文化	
17 京都府教	26 金 講義	
18 特 龍	朝三時一午後二時間	東
19 谷 教授会	27 土	女

29	△	
30		都5
十一月		
6		都6
13		都7
20		都8
23（祭日）～25日	学会	
26、27	信州	
28	（教授会カ）	